

奄美における兼久式土器の基礎的研究

～小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心に～

鼎 丈太郎

はじめに

最近、奄美大島で発見された注目遺跡に小湊・フワガネク（外金久）遺跡がある。この遺跡は、ヤコウガイの大量集積、貝匙製作場所や住居跡、そして墓壙など次々に重要な発見が報告された遺跡で、ヤコウガイ交易の可能性や階層のある社会の出現など、奄美諸島の古代史を大きく塗り替えうる可能性を持つ重要な遺跡である。この小湊・フワガネク（外金久）遺跡から出土する土器は、奄美諸島特有の在地土器である兼久式土器であり、小湊・フワガネク（外金久）遺跡のようにヤコウガイを集積している他遺跡において出土している土器もその殆どが兼久式土器である。しかし、これらの遺跡がヤコウガイ大量出土遺跡として脚光を浴びている一面、兼久式土器研究は未だ混迷しており、弥生～平安時代という広大かつ漫然たる時間幅で捉えられているのが現状である。

これまでの兼久式土器研究は、それぞれの遺跡で出土した兼久式土器のみを対象としたものが多く、遺跡間での相対的な兼久式土器研究は殆ど行われていない。よって、同じ兼久式土器であっても分類や編年の細分化が進んでおらず、全体としては判然としない状況に陥っている。

では、どのようにすれば兼久式土器の研究が進み、兼久式土器が遺跡の年代決定に有効な資料となるのであろうか。発掘調査方法や資料分析の問題もあるが、やはり一番重要なのは遺跡間の相対的比較による研究が重要である。そのためには、今までに出土しているすべての兼久式土器に使用可能な土器分類を作成し、分析作業を行うという基礎作業を踏まえて兼久式土器研究を進めていく事が重要なである。また、その作業は各遺跡の兼久式土器の実態を明らかにする事になり、遺跡間の比較検討を行うことで兼久式土器全体の実態も明らかにする事を意味している。

そこで、本論では小湊・フワガネク（外金久）遺跡の兼久式土器を中心に、兼久式土器の実態解明及び編年研究の基礎的作業として使用可能な分類案の作成を行ってみたい。

第一章 問題の所在

兼久式土器は、奄美大島を中心とする奄美諸島に広く分布している土器である。多くは砂丘遺跡から出土しており、器形は甕形土器と壺形土器が主である。底部に木葉圧痕を有する事が一番の特徴だが、未だに判然としない部分が多い土器である。そこで、本章では兼久式土器の先行研究を整理しながら兼久式土器が抱える諸問題点を明らかにし、特に解決すべき問題の抽出を行いたい。

先行研究を整理してみると、1991年に発掘調査が行われた土盛・マツノト遺跡以降に発掘調査及び研究成果が画期的に進展していることが確認できる。土盛・マツノト遺跡発掘調査以前の兼久式土器研究の認識は、遺跡規模は小規模で兼久式土器は少量しか出土しないというものであった。しかし、土盛・マツノト遺跡発掘調査以降は、用・ミサキ遺跡や小湊・フワガネク（外金久）遺跡など、遺跡

規模が広大で兼久式土器の出土量が多く、多種多様な共伴遺物を有する遺跡が調査されている。また、それらの成果に伴い研究の飛躍的な進展がみられる。そこで、本章では便宜上、1 土盛・マツノト遺跡発掘調査以前の兼久式土器研究、2 土盛・マツノト遺跡発掘調査以降の兼久式土器研究の2節に分けて研究略史をまとめたい。

1 土盛・マツノト遺跡発掘調査以前の兼久式土器研究

兼久式土器の名称は、1974年に河口貞徳氏が奄美諸島の土器の形式設定を行う際に、伊仙町面縄第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を標識として設定し「兼久式土器」と名付けたのが始まりで、その名称は今日まで使用されている（河口 1974）。

兼久式土器自体の発見は、名称設定以前の1930年に廣瀬祐良氏・小原一夫氏が徳之島の伊仙町にある面縄第一貝塚を調査した際に出土しているのが初見である（中山 1994）。また、中山清美氏が『奄美、沖縄においても「かねく」とは砂地のことを「かねく」と呼んでおり、兼久式土器がほとんどこれら砂丘地から出土している』（中山 1988b）と指摘している通り、兼久（かねく）式土器とは地元の人にとって出土地が容易に想像できる名称でもある。河口氏は兼久式土器の年代を「石斧を伴わないこと」、「弥生式土器の終末期の箇貫遺跡の土器の影響で底部に木葉圧痕をもつこと」以上の二点を理由に兼久式土器に弥生時代後期の年代を推定している（河口 1974）。河口氏は、兼久式土器に類似する沖縄県出土土器との比較の際、兼久式土器の特徴として「平底の底部に木葉圧痕があり、頸部に絡縄凸帯をめぐらせる（縦位方向の凸帯あり）。沈線文は鋸歯文を基本とし、直線的である。口唇部に刻目を施す。単独遺跡を形成する」と提示している（河口 1974）。この河口氏の論文で初めて兼久式土器との名称が示され、兼久式土器の特徴や年代がおおまかに設定された。このことは僅かながらも兼久式土器の実態が確認されたという点で重要である。

喜瀬・サウチ遺跡は、1978年に河口貞徳氏により発掘調査が行われている（河口 1978）。喜瀬・サウチ遺跡では、面縄西洞式土器、兼久式祖形土器、兼久式土器などが出土した。兼久式祖形土器とは河口氏により命名された土器で、河口氏は兼久式土器に先行する土器とした。また、喜瀬・サウチ遺跡では文化層が三層確認されており、上位文化層が兼久式土器相当時期、中位文化層が弥生前期～中期相当時期、下位文化層が面縄西洞式土器相当期と報告している。喜瀬・サウチ遺跡の主体は中位文化層であり、中位文化層からは貝札（広田遺跡下層タイプ）と兼久式祖形土器が出土している。喜瀬・サウチ遺跡では、兼久式土器が甕形土器と壺形土器のセットで存在していることも確認されている。河口氏は、在地土器の器形分化について弥生式土器の器形分化の影響を示唆している。また、土器の底部の形状や横位方向隆帯文に刻目を施すことなど、成川式土器の影響も同時に示唆している。そのことは土器文化の接触と変容の流れと題して図解も行われており、土器の変容を推測している。兼久式土器の年代については、「貝札（広田遺跡下層タイプ）出土」、「兼久式祖形土器から兼久式土器への系列が明瞭である」、「在地土器の器形の分化が確認できる」などの点から、弥生時代後期と年代比定している（河口 1978）。この見解は、1974年の河口氏の兼久式土器の年代と同じ見解である（河口 1974）。喜瀬・サウチ遺跡では、兼久式土器が壺形土器を伴うことや兼久式土器より下層に貝札（広田遺跡下層タイプ）が出土するなど、新たに兼久式土器の実態をつかむことができる資料が確認された点が重要である。

面縄第1・第2貝塚は、1982年に伊仙町教育委員会により調査が行われている（牛ノ浜・堂込 1983）。面縄第1貝塚からは、爪形文土器・市来式土器・貝輪・兼久式土器・螺蓋製貝斧・貝匙・貝製品・開元通宝などが出土し、遺構として洞穴内より箱式石棺墓が発見された。特に注目する点として開元通宝が出土している点があげられる。開元通宝は、A-0区貝層下部より3点出土している。また、1930年的小原一夫氏の発掘調査の際も貝層下部より1点確認されている。放射性炭素年代測定法によると $\{1355 \pm 60 \text{ B.P.Y (AD 650)}\}$ を示し、武徳4年（AD 621）に開元通宝が初鋳されている事実とも矛盾しない。A-0区から出土する土器の大半が兼久式土器であることから、兼久式土器と開元通宝の共伴の事実は兼久式土器の編年研究において重要な意味をもつ。また、面縄貝塚の報告では、共伴遺物や放射性炭素年代測定法の結果より、兼久式土器の年代を弥生時代後期から7世紀の間にあたるものとして報告している（牛ノ浜・堂込 1983）。面縄第一貝塚で特に重要な点は、開元通宝の出土があげられるだろう。開元通宝が出土した層は兼久式土器が出土しており、兼久式土器の年代比定に重要な資料として認識できる。事実、面縄第一貝塚出土の開元通宝は様々な編年研究に使用されている（牛ノ浜・堂込 1983、弥栄 1984、立神 1986、戸崎・長野 1987、高梨 1995・1998・1999a・1999b）。

須野・コビロ遺跡は、1982年に熊本大学により発掘調査が行われている（熊本大学文学部考古学研究室〈内山〉1983）。四基の土壙墓と箱形石棺墓一基、兼久式土器を伴う生活跡（ピット4基）などが確認されている。墓は、兼久式土器の時期の遺構ではなく、兼久式土器の出土層よりも上層で検出されている。兼久式土器は少量細片であるが、文様を中心に分類作業が行われており、I類土器を有文土器、II類土器を無文土器として大別している。I類土器は、沈線文の有無によりI類a（沈線文を有しない）とI類b（沈線文を有する）に細分し、II類土器は、口縁部の形状でII類a（口縁部が内反もしくは垂直に立つ）とII類b（口縁部が強く外反する厚手の土器）に細分を行っている。無文土器の細分には、口縁部の形状により細分が行われているが、有文土器の細分は沈線文の有無で行われている（熊本大学文学部考古学研究室〈内山〉1983）。須野・コビロ遺跡の分類は、細分の際にI類は沈線文の有無で分類し、II類は口縁部の形状で細分を行っている。よって、I類とII類の細分は対応させることができない。ピット内から土器片が確認されたようだが、数量や出土遺物は不明である。

辺留・ベルクボ遺跡は、1982年に熊本大学により発掘調査が行われている（熊本大学文学部考古学研究室〈松原〉1983）。土器は、表面採集資料と出土資料を合わせて約450点あるが、器形を復元できる土器はない。辺留・ベルクボ遺跡では、器形・文様の相違により6類に分類を行っている。I類土器は、口縁部が外反し内器面に稜線のある土器（弥生時代後期相当）、II類土器は、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付けて刻み目を施し、更に凸帯の上下に沈線を施している。口縁部がやや外反する深鉢形土器（兼久式土器）、III類は、貼り付け凸帯を弧状や縦に施し、ナデ調整により仕上げられている（フェンサ下層式相当）、IV・V・VI類の型式は不明とされている（熊本大学文学部考古学研究室〈松原〉1983）。辺留・ベルクボ遺跡と須野・コビロ遺跡は、熊本大学文学部考古学研究室から同時に報告されているが、辺留・ベルクボ遺跡の兼久式土器は、小破片のため分類されておらず、辺留・ベルクボ遺跡では、同年調査・報告の須野・コビロ遺跡の兼久式土器の分類は使用されていない。

須野・アヤマル第二2貝塚は、1978年に笠利町教育委員会により発掘調査が行われている（池畠1984）。須野・アヤマル第2貝塚における兼久式土器は、第2トレンチから多く出土している。また、共伴遺物としてヤコウガイの蓋、外耳土器、沈線文土器などが出土している。兼久式土器は、無文・沈線文・刻目隆帶文を施す土器が出土しているが、遺跡全体での兼久式土器の出土量は少量であり小破片が多い。池畠耕一氏は、須野・アヤマル第2貝塚出土の土器を7つに分類し、VII類に兼久式土器をあてている。須野・アヤマル第2貝塚の兼久式土器は、弥生時代の遺物を出土するグリッドやトレンチからは出土せず、第2トレンチでVI b類とされた土器の上層から出土している。池畠氏によるとVI b類は、笹貫式土器（成川式土器）並行期の土器と考えられ、古墳時代後期に位置付けられると提示している。また、須野・アヤマル第2貝塚の報告書作成時に発掘調査が行われていた、和野・長浜金久遺跡の共伴遺物が平安時代と推測されることも含め、兼久式土器の年代を古墳時代後期から平安時代としている。なお、須野・アヤマル第2貝塚では、第2トレンチの貝を使用して放射性炭素年代測定を行っている（池畠1984）。

No.1. 貝（第2トレンチ6層、兼久式） 1100 ± 130 B. P.

No.2. 貝（第2トレンチ4層、兼久式） 940 ± 150 B. P.

放射性炭素年代測定の結果も、兼久式土器が弥生時代後期より新しいとする池畠氏の推測と一致している。須野・アヤマル第2貝塚における池畠氏の見解は、それまでの研究で兼久式土器の初現が弥生時代後期頃とする年代認識と相違することが注目される。また、兼久式土器の年代比定の際に使用されたVI b類について笹貫式土器並行期の土器に類似することから、兼久式土器を古墳時代後期に位置付けている。この笹貫式土器であるが、1974年の河口貞徳氏の見解では弥生式土器の終末期と位置付けられており、年代が相違する。共伴遺物である笹貫式土器の年代も判然としないことが理解できる。しかし、笹貫式土器が関わるという点から、喜瀬・サウチ遺跡と須野・アヤマル第2貝塚から出土する兼久式土器は相対的には近い時期の土器であると考えられる。

1983年、中山清美氏は兼久式土器の問題点を提起するために、用遺跡・ナビロ遺跡・万屋泉川遺跡出土の兼久式土器を器形・文様などの特徴から5類に分類している（中山1983年）。

第1類：頸部近くに一条の貼り付け凸帯文をめぐらし、凸帯部には刺突や草茎状のもので刻目が施されるタイプ。

第2類：口縁部がやや外反し、頸部に一条の貼り付け凸帯文を有する。凸帯文の上下に浅い沈線文が鋸歯状に近い文様帶をなしているタイプ。

第3類：器形がアサガオ状に広がり、底部に葉痕を有する無文のタイプ。

第4類：凸帯文を縦位に口縁部から頸部にかけて貼り付け、頸部にも一条の凸帯文をめぐらしているタイプ。

第5類：薄手土器で、口縁部から胴部にかけて細い沈線による文様帶をもつタイプ。

1～5類の共通点として、底部に葉痕を有していることがあげられている。中山氏は、兼久式土器を奄美在地の土器とし、河口氏の設定した兼久式土器の時期設定（弥生時代後期からの時期）を支持し、「かなり息の長い土器」であると述べている（中山1983）。この論文で中山氏は、それまで個々の遺跡で行われていた分類を初めて兼久式土器全体を視野に入れた分類として行った。このことは兼久式

土器研究において重要である。また、中山氏はこの論文で沖縄貝塚後期土器や南九州の弥生式土器との比較検討の重要性を指摘している。

和野・長浜金久遺跡は、1983年に鹿児島県教育委員会により発掘調査が行われている（弥栄 1984・1987・1995）。和野・長浜金久遺跡は、文化層が三層あり間層を挟んでいる。この三層の文化層の下層からヤコウガイを中心とする貝殻集積が確認された。文化層の年代は、放射性炭層年代測定による年代が提示されている。下層がAD 830～890年、中層がAD 1020～1050年、上層がAD 1240～1290年との結果が得られている。遺物は下層から土器・石器・貝器・鉄器・貝殻が出土している。下層から土師器の甕形土器が出土していることが注目され、兼久式土器は文様の組み合わせなどから5類に分類されている。

I類：沈線文を施している

II類：沈線文と刻目隆帶文を組み合わせた土器

III類：刻目隆帶文を付ける土器

IV類：横位方向隆帶文に縦位方向隆帶文を組み合わせたものや、横位方向隆帶文が変化したものがある土器

V類：無文土器

それぞれの分類は、年代も比定されており、I類とII類は、面縄第一貝塚の第IV層出土土器と類似していることから兼久式土器の初期として7世紀とされており、IV類は放射性炭素年代測定により9世紀に比定、V類は須野・アヤマル第2貝塚の土器に類似することから須野・アヤマル第2貝塚の放射性炭素年代測定から10世紀と年代比定している。このことは、兼久式土器全体の土器変遷を提示した最初の見解として重要である。しかし、兼久式土器の出土層は大半が19層出土である。戸崎勝洋氏・長野真一氏も指摘しているように、同一層の土器群に相違する年代が設定されていることは慎重に検討するべきであろう（戸崎・長野 1987）。また、少数の放射性炭素年代測定により実年代を設定している点も留意すべきである。

1984年中山清美氏は、兼久式土器の編年問題や前後関係の土器の問題、共伴資料についての問題など様々な問題を提起するため、先行の発掘調査報告を取り上げ1983年の分類に合わせて兼久式土器の整理を行っている。この論文では、兼久式土器の器形を中心に再度分類しており、器形で判別できないものは文様構成をもとに分類を行っている（中山 1984）。

第1類：頸部近くがしまり、口縁部にかけて外反する。文様は貼り付け凸帶文一条を器面の全体にめぐらす。凸帶文には刻目を有し、凸帶文の上下には沈線文が入っている。底部はくびれ平底で葉痕文を有するタイプ。

第2類：器形そのものは第1類土器と類似するが、貼り付け凸帶文が頸部に一条めぐらされ、貼り付け凸帶文に刻目を有する。

第3類：口縁部がやや外反するもの垂直のもの、アサガオ状に開くタイプの土器を第3類とした。文様構成はなく、無文で口縁部近くがナデ調整されている。

第4類：器形は大型で、頸部から口縁部にかけて外反するものと、垂直に近いものがある。文様は、細かい貼り付け凸帶文を有するものと、口縁部内器面にまで太い貼り付け凸帶文を有するタ

イプがあり、これにタテ・ヨコの貼り付け凸帯文を組み合わせるタイプとその上下に数本の細かい沈線による文様を施したものがある（沖永良部のスセン当式に類似）。

第5類：頸部がややしまり、口縁部が垂直からやや外反し、胴部が長い。文様は、口縁部から頸部にかけて細い沈線や、浅い沈線によって施す。特例として口縁部がやや内反するタイプもある。分類の前後関係は不明と述べている。器形を中心に分類を行なうという新たな試みを行っている点や第4類の土器に対して、沖永良部のスセン当式土器の可能性を示唆している点などが注目すべき点である。また、兼久式土器の出土した遺跡を数例あげて概説を行い、そこから兼久式土器の抱える問題点（兼久式土器と呼ばれている土器の判断が各調査者に一任されている点。兼久式土器が多様な土器であること。兼久式土器底部の形状として、脚台と上げ底と木葉圧痕のセットの可能性を示唆。兼久式土器を用いていた時期は小規模の遺跡を形成し、定住しなかった点。）を提起している（中山 1984）。中山氏が 1984 年に問題提起をしている通り、兼久式土器の実態が未だつかめていないことが確認できる。

万屋・泉川遺跡は、1985 年に鹿児島県教育委員会により発掘調査が行われている（立神 1986）。万屋・泉川遺跡は、海進海退の影響をうけ、二次的な堆積により形成されている。出土土器は、兼久式土器を中心に土師器や須恵器を出土している。土師器は口縁部破片で 9～10 世紀のものと推定されている。兼久式土器については、文様や隆帯文の状況より分類されている。甕形土器は 6 類に分類され、壺形土器は 5 類に分類されている（立神 1986）。

甕形土器分類

I 類：沈線文を施している土器

II 類：沈線文と隆帯文を組み合わせた土器

III 類：刻目隆帯文をもつ土器

IV 類：横位方向隆帯文に縦位方向隆帯文を組み合わせたものや、横位方向隆帯文が変化した土器

V 類：無文土器

VI 類：横位方向隆帯文や横位と縦位の粘土帶を組み合わせたものに刻目を施す土器

この分類は、和野・長浜金久遺跡で分類されたものを基準に万屋・泉川遺跡で確認されたIV類を加えた分類である。他遺跡と同じ分類を使用している点は注目される。また、万屋・泉川遺跡でも和野・長浜金久遺跡と同じ年代設定が行われている。万屋・泉川遺跡は、二次堆積の遺跡とされており年代設定を行う資料として有効であるかは慎重に検討すべきである。また、ここでも放射性炭素年代測定によって実年代を設定していることが留意される。

先山遺跡は、1985 年に喜界町教育委員会により発掘調査が行われている（戸崎・長野 1987）。戸崎勝洋氏・長野真一氏によると、先山遺跡は保存状態も不良なため詳細は明らかではないとされている。しかし、戸崎氏・長野氏は先山遺跡の兼久式土器の時期について、他遺跡の分析より大凡の年代を設定している。

○面縄第 1 貝塚の A-0 区では、兼久式土器の主体層より下位から開元通宝が出土している。

○面縄第 1 貝塚の A-0 区出土の兼久式土器は、刻目突帯文+沈線文の有文と、無文の甕形土器が見られる。有文の甕形土器の器形は先山遺跡と同様、口縁部が外反するのが一般的で、底部の形状も

くびれ平底である。

○アヤマル第2貝塚では、古墳時代の筮貫式土器並行期と思われる土器を包含する層よりも上層より兼久式土器が出土する。初源は古墳時代後期であることを指摘。

○アヤマル第2貝塚出土の中には、口縁部が内傾する無文の甕形土器が出土しており、先山遺跡の11号トレンチ7とよく類似している。

○長浜金久第1遺跡からは、黒色土器、布目压痕土器、内面ヘラけずりの甕形土器が出土し、6世紀から10世紀の所産として細分し編年が示されている。しかし、112点の甕形土器の内、13層1点、21層1点、他は全て19層の出土とされる。また、出土している47点の甕形土器、19点の土師器の全てが19層からの出土である等からやや慎重性にかけるきらいはある。

他遺跡との分析結果から、先山遺跡出土の兼久式土器は、古墳時代から平安時代の間に位置付けられている。また、高宮廣衛氏が兼久式土器を沖縄編年（暫定編年）のアカジヤンガ一式土器からフェンサ下層式土器の間に位置付けている（高宮1990）こともあげている（戸崎・長野1987）。先山遺跡では、遺跡そのものの保存状態は不良であったようだが、戸崎氏・長野氏は先行研究の成果を整理することにより兼久式土器の年代を設定し、その年代幅の中に先山遺跡もふくまれるであろうことを推測している。このように、個々の遺跡で検討できない場合など、遺跡の実態をつかむために他遺跡の類似資料を検討することは重要である。

2 土盛・マツノト遺跡発掘調査以降の兼久式土器研究

土盛・マツノト遺跡は、1991年に笠利町教育委員会により発掘調査が行われている（中山1992b）。土盛・マツノト遺跡はそれまでの兼久式土器を出土する遺跡と比較すると画期的な成果をあげた遺跡である。

○兼久式土器等出土遺物が今までの遺跡とは比較にならないほど大量に出土した。

○白砂層を挟み二つの文化層が存在し、どちらの文化層も兼久式土器が主体である。

○共伴遺物が量・種類ともに多く、出土した共伴遺物を羅列すると、土師器・須恵器・水引き椀・鉄製品・銅製品・ガラス製管玉・雁股状の鉄鏃・貝製品・貝小玉・土製品・フイゴの羽口・鼎型土器などそれまでの兼久式土器を出土する遺跡では見られなかった共伴遺物が多数出土した。

土盛・マツノト遺跡の成果をあげてみると、土盛・マツノト遺跡がそれ以前に確認されていた他遺跡と比較にならないほどの成果をあげた遺跡であることが容易に理解できる。数多くの成果の中で土盛・マツノト遺跡において特に注目すべき点として、兼久式土器が上下二層に分かれて出土している点があげられる。これは、兼久式土器を出土している遺跡の中で唯一であり、この成果からそれまで兼久式土器研究で行えなかった層位学的研究が行えるようになり、兼久式土器の研究に画期的な成果をもたらすことが期待される。よって、単純層で出土することが大半を占める兼久式土器の実態をつかむのに極めて有効な遺跡である。1995年に報告された用見崎遺跡（笠利町教育委員会）で土盛・マツノト遺跡の放射性炭素年代測定が報告されている（中山1995b）。

2区上層 炭化物 2000 ± 80 y. B. P. (50B. C)

14区上層 炭化物 1560 ± 80 y. B. P. (A. D. 390)

9区下層 炭化物 1070 ± 120 y. B. P. (A. D. 880)

放射性炭素年代測定法の結果によると、上層の炭化物が下層の炭化物より古いという結果が出ている。なお、中山氏は土盛・マツノト遺跡の文化層について出土遺物等により時代を設定し、上層を7~8世紀代、下層を弥生時代後期としている（中山 1995b）。

1992年中山清美氏は、土盛・マツノト遺跡と用・ミサキ遺跡において、貝札と兼久式土器が共伴もしくは共伴した可能性があることが確認されたことをうけて、貝札と兼久式土器の関係について考察をしている。また、貝札を通して兼久式土器が抱えている問題も検討している。土盛・マツノト遺跡発掘までは、兼久式土器と貝札が共伴するのか疑問視されていた（中山 1992a）が、1990年に土盛・マツノト遺跡で貝札（広田上層式貝札）が二点表面採集され、土盛・マツノト遺跡上層からも無文の貝札や凹文と沈線文による貝札が検出されたことにより、兼久式土器に貝札が伴う可能性があることが確認された。

その後、1993年には用・ミサキ遺跡で広田上層式の貝札と兼久式土器が共伴し、改めて兼久式土器と貝札が共伴することが確認された（中山 1992a）。中山氏は国分直一氏の見解を元に、広田下層式貝札を弥生前期末、広田上層式貝札については弥生時代後期末から古墳前葉に位置付けている。この貝札の年代を通して兼久式土器の問題点である年代について検討が行なわれている。兼久式土器は、弥生時代後期や奈良・平安時代と様々に位置付けられ、その帰属年代は曖昧であった。これに対し中山氏は兼久式土器の帰属年代を設定する際に「問題となるのは兼久式土器として扱うのはどのようなタイプかを示さなければならなかった。それには土器様式か文様等で分類を行いながら他の共伴遺物を調査し、兼久式土器のセット関係まで研究する必要がある。いわゆる空間的広がりである」とし、兼久式土器の実態を解明してどのタイプ（分類）の兼久式土器を使用するのかにより帰属年代が変化するとしている。そこで、中山氏は兼久式土器を「底部に木葉圧痕をもつ土器」と定義し、貝札等共伴遺物の年代から兼久式土器が「息の長い土器」であり、弥生後期から平安期相当の土器であるとの考えを考察している。また、中山氏は兼久式土器を長期間使用している土器であるとし、各研究者及び遺跡において相違するタイプ（分類）の兼久式土器で分析を行なっている為、兼久式土器の帰属年代が弥生時代後期から古墳時代という長期間の相違を生じていると指摘した。その為、長期間使用している土器であるという点を踏まえると、各研究者の意見はいずれも正しい意見であることが理解できるとしている。また、土盛・マツノト遺跡については共伴遺物等により、第一文化層（上位文化層）が7~8世紀相当の時期で、兼久式土器は下限の土器であるとしている。貝札は無文と太めの刻文（方形）のものが検出している。第二文化層（下位文化層）沈線文のみの兼久式土器があり、貝札の文様に類似するものがあることが報告されている。兼久式土器の上限の土器と考えられ、表面採集の貝札（広田上層）はこの層からの出土であろうと推測されている。なお、これら共伴遺物について中山氏は国分直一氏から「共伴遺物を見て、今後遣唐使との関係も注目され、大変な発見になる」と指摘をうけ、遣唐使との関わりも興味深いものがあると示唆している（中山 1992a）。

用・ミサキ遺跡の兼久式土器は、土盛・マツノト遺跡の第二文化層と類似し兼久式土器の古い段階の土器であるとしている。また、兼久式土器と共に広田上層式の貝札が出土している。中山氏は、土盛・マツノト遺跡と用・ミサキ遺跡によって、兼久式土器の古い段階の土器に広田上層の土器が共伴することが大きな成果であると述べている（中山 1992a）。この論文において中山氏は、貝札との

関係を重要視している。兼久式土器の帰属年代については弥生後期から古墳時代と長い時間幅で捉えており、兼久式土器が長期間使用された土器であるため、兼久式土器のどのタイプ（分類）を用いるかにより兼久式土器の帰属年代は変化すると指摘している。中山氏のこの年代理解は、それまでの先行研究を踏まえ、土盛・マツノト遺跡や用・ミサキ遺跡など新たに出土した遺物による検討により導かれたという点で重要であると考えられる。しかし、中山氏のこの論文で最も重要な点は、兼久式土器の年代設定ではなく、兼久式土器の実態を明らかにし分析を行なう必要性があると述べている点にある。中山氏は兼久式土器の定義を行い、兼久式土器を文様等により分類し兼久式土器のセット関係を注目し研究すべきであると指摘している。この見解は、それまでの先行研究の分類作業・分析に一石を投じるものであり特に重要である。

1993年高梨修氏は、日本全土で各時代の編年大綱が作成されているのに対し、南西諸島（特に奄美諸島）の弥生～平安時代の土器は未だ不明であり、当該地域の歴史変遷を理解する上で大きな障害であり、当該地域の歴史変遷を解明する研究基盤を得るために、弥生時代相当期以降の土器（兼久式土器）の編年の確立が必要であると提示している。弥生式土器相当期以降の編年確立のための基礎的作業として、兼久式土器の研究方法の検討が必要であるとし、兼久式土器の研究に有効な研究方法の模索を行なっている。高梨氏は、沖縄諸島の編年研究を検討し、兼久式土器の資料的属性（○装飾に乏しい○器形の形態差に乏しい○層位的疊重を持つ遺跡が少ない）を踏まえながら、兼久式土器に有効な研究方法を検討している。そして、兼久式土器の資料的属性に類似する土師器の編年研究（○分布論○型式論）が兼久式土器編年研究の基礎研究として有効であると指摘している（高梨 1993）。また、砂丘遺跡における一括遺物の保証性に関しては、遺物の出土状態に関する平面的・垂直的位置や出土層位等の記録を行い、その記録に基づいた分布論的検討を行なうことで解消されるとしている（高梨 1993）。高梨氏のこの論文は、兼久式土器の研究方法について検討を行い、その対処策の研究方法を提示した初めての論文である。兼久式土器の資料的属性により、従来の南西諸島で行なわれていた研究方法よりも土師器の分布論・型式論的研究方法が有効であるという新たな研究の視点が述べられた点が重要である。

土盛・マツノト遺跡の発掘調査の成果は、遣唐使の南島路との関わり（中山 1992a）やヤコウガイ大量集積等、本土地域の古代史研究との関わりが深いことが指摘された。この点を重視し鈴木靖民氏・中山清美氏は、1995年に『シンポジウムよみがえる古代の奄美』と題してシンポジウムを開催した。このシンポジウムにおいて、中山清美氏・高梨修氏が土盛・マツノト遺跡について報告を行なっている（高梨 1995・中山 1995a）。

高梨修氏は、兼久式土器の研究略史を行い、兼久式土器の実態が未だ不明である点や研究方法の問題、兼久式土器全体を把握する資料分析の欠如等の問題を提起している。また、高梨氏は 1993 年の論文で指摘した兼久式土器の特徴により、分布論・型式論的研究方法を用いて土盛・マツノト遺跡の出土土器を分析し分類を作成している。層位や型式学的研究方法により設定を行った分類に搬入資料（共伴遺物）より年代の設定も行なっている（高梨 1995）。分類は文様（特に口縁部隆帯文の刻目）を中心に行なわれ、兼久式土器 A・兼久式土器 B・兼久式土器 C の三つに分類されている。分類は次の通りである（高梨 2000）。

兼久式土器 A：口縁直下に一条の突帯が廻らされ、突帶上には粗雑な刻み目が連続的に施される。雑然とした意匠を持つ文様が施され、施文部位は突帶の上下に及ぶものがある。

兼久式土器 B・C：口縁直下に一条の突帯が廻らされ、突帶上には刻み目が連続的に施されるが、単純化されたものも含まれる。文様は単純なものが施されるが、無文のものも多い。文様の施文部位は、突帶の上部にほぼ限定される。

兼久式土器 C：口縁下部に一条の突帯が廻らされるが、全周しないものも多い。突帶上に施される刻み目は非常に単純化され、疎らである。全く刻み目が施されないものも多い。文様はほとんど施されず、無文である。

土器の変遷については、まず層位の違いによりおおまかな変遷を行なっている。土盛・マツノト遺跡で兼久式土器 A は下層からのみ出土している。このことから兼久式土器 B・C より古いと設定している。次に高梨氏は層ごとに出土土器の特徴を比較し、兼久式土器の変化の方向性を導きだしている。土盛・マツノト遺跡では、土器の文様や隆帶文の刻目の変化が、兼久式土器 A から兼久式土器 B・C へ移行するにしたがって装飾が単純化することを指摘している。さらに細分した兼久式土器 B・C を分析し、装飾の単純化の方向性から兼久式土器 B より装飾の単純である兼久式土器 C が新しいと設定している。

つまり、兼久式土器 A→兼久式土器 B→兼久式土器 C へと兼久式土器が変遷すると提示している（高梨 1995）。また、この兼久式土器の変遷に対し共伴遺物による年代設定が行なわれており、兼久式土器 A が 5~7 世紀、兼久式土器 B が 7~9 世紀、兼久式土器 C は 9 世紀以降と設定している（高梨 1995）。この報告は、1993 年に提示した研究方法の実際の検証であり、兼久式土器の研究にとって有効な研究方法である。また、同じ層から出土した兼久式土器 B と兼久式土器 C を型式学的に分類・分析を行なつており、従来提起されていた兼久式土器の特徴（○装飾に乏しい○器形の形態差に乏しい○層位的畳重を持たない）より型式学的分類・分析は困難であるという研究認識を覆している点ことも注目される。なお、調査方法に関して出土遺物の出土状態に関する平面的・垂直的位置や出土層位等の記録を行うことが重要である点も指摘している。この指摘は、砂丘遺跡の遺物の資料的価値をあげることにつながる重要な点である。高梨氏は今後、土盛・マツノト遺跡を基軸として他の資料との比較検討を進めていくことが重要であると示唆している（高梨 1995）。1993・1995 年の高梨氏の研究は、これまでの兼久式土器の調査・分析方法を検討しており、同時に最も有効であると思われる研究方法を提示し、緻密な調査と兼久式土器全体を視野に入れた研究を行なうことの重要性を提示している。高梨氏の行なっている研究方法は、今後の兼久式土器研究に極めて有効な方法であると考えられる。

用・ミサキ遺跡は、笠利町教育委員会や熊本大学文学部考古学研究室によりたびたび調査が行なわれている（笠利町教育委員会 1995b、熊本大学文学部考古学研究室 1995・1996・1997）。用・ミサキ遺跡からも大量の兼久式土器が出土している。兼久式土器の包含層は単純層（一層）だが、兼久式土器の下層に不明の土器（熊大 1997 年報告 XVI 層土器）が確認されている。共伴遺物としては貝札（広田上層式）や開元通宝（出土層は不明）があり、特に貝札は兼久式土器と共に初めて確認された遺跡である。貝札は多数の研究者が兼久式土器編年の指標としている、この点からもこの発見がいかに重要であるかが理解できる。

用・ミサキ遺跡では兼久式土器の分類作業が行なわれているが、調査が数回行なわれていることもあり、笠利町教育委員会と熊本大学文学部考古学研究室で相違する分類作業を行なっている。そのため、同一遺跡の兼久式土器分類が二種類あり、用・ミサキ遺跡の兼久式土器の実態把握が困難になっている（笠利町教育委員会 1995b、熊本大学文学部考古学研究室 1995・1996・1997）。

笠利町教育委員会の分類は、文様を中心に分類が作成されている（中山 1995b）。出土土器資料の総数は口縁部 203 点、底部 47 点、胴部 882 点である。

1 類土器：横位方向隆帯文の上下に沈線文を施す。

2 類土器：横位方向隆帯文の上部にのみ沈線文を施す。

3 類土器：横位方向隆帯文のみを施す。

4 類土器：無文土器。

その他：縦位方向隆帯文を施す。

笠利町教育委員会の分類は、中山氏により分類されている。中山氏は 1983 年・1984 年に分類設定を行なっているが、その際作成した分類ではなく新たに分類を設定している。用・ミサキ遺跡の分類も、中山氏が 1983 年に設定した分類と同じく文様を主体として分類しているが、中山氏の 1983 年・1984 年発表の分類との関わりや比較は行われていない。笠利町教育委員会発掘調査の出土遺物で注目される点は貝札の出土があげられる。貝札は、広田上層の貝札と類似しており、年代は 4 世紀前後と報告されている。兼久式土器に貝札（広田上層）が共伴したのは初めてであり、兼久式土器の研究においても重要である。また笠利町教育委員会の報告では、住居が 2 棟検出されている。住居内の貝（マガキ貝）の放射性炭素年代測定法の結果は、 1800 ± 80 y. B. P (A. D. 150) という結果が出されている（中山 1995b）。この年代結果は貝札の年代設定の際の参考にしたと述べている。

熊本大学文学部考古学研究室の分類は、口縁部の文様を中心に 4 つに分類されている。

1 類は沈線文と隆帯文によりさらに 3 つに細分され、2 類は隆帯文によりさらに 2 つに細分がされている（熊本大学文学部考古学研究室 <美浦> 1995・<藤江> 1996・<小倉> 1997）。分類は次の通りである。

1 類：文様が隆帯文と沈線文により施される。

沈線文の施文位置と隆帯文によりさらに細分する。

1-a 類：横位方向隆帯文の上下に文様を施す。

1-b 類：横位方向隆帯文の上部にのみ文様を施す。

1-c 類：隆帯文が横位の他に縦位または斜位に廻るもの。

2 類：横位方向隆帯文のみを施す。

隆帯文によりさらに細分を行なう。

2-a 類：横位方向隆帯文のみを施す。

2-b 類：横位方向隆帯文 + 縦位方向隆帯文の土器。

3 類：沈線文のみを施す。

4 類：無文土器。

細分も含め、細かく分類されているが、熊本大学文学部考古学研究室が 1983 年に発掘調査を行なっ

たコビロ遺跡の分類と相違する分類である。また、1995 年に笠利町教育委員会（中山 1995b）が行なった用・ミサキ遺跡の分類とも相違する。

熊本大学文学部考古学研究室の調査によると用・ミサキ遺跡の兼久式土器は熊本大学分類の 1・2 類が大半の 72% 占めていることが報告されている。出土土器で注目すべき点として、1996 年の熊本大学文学部考古学研究室の報告にある口唇部に刻目を有する土器があげられる。この土器は、1996 年の報告では沖縄の兼久原貝塚の出土土器に類似していると報告されている（熊本大学文学部考古学研究室 1996）。しかし、翌年の 1997 年の熊本大学文学部考古学研究室の報告では、この土器は沖縄のアカジヤンガーに比定されている。また出土土器でもう一点注目すべき点として、1997 年の報告に記載されている XVI 層の土器（同一個体と思われる土器片 9 片）があげられる。XVI 層の土器は、マツノト遺跡で類例が確認されているが型式名も時期も確定していないと報告されている。しかし、兼久式土器を出土している VI 層より下位の層から出土しているため、兼久式土器より古い土器と設定されている（熊本大学文学部考古学研究室 1997）。

共伴遺物については、熊本大学文学部考古学研究室による 1995 年の報告で開元通宝の出土が確認されている。IV 層の最下部からの出土であるが、V 層が存在しない地点であり VI 層（包含層）に含まれていた可能性が有るため、開元通宝の出土層位の決定されていない。この開元通宝は初唐の特徴を備えた官鑄銭であると指摘されている（熊本大学文学部考古学研究室 1995）。

以上、用・ミサキ遺跡をまとめてみると、同一遺跡の調査でありながら、笠利町教育委員会と熊本大学文学部考古学研究室の二つの分類があり、それらの分類は先行研究の分類とも相違している。また、先行研究の分類と比較検討が行なわれていないため、用・ミサキ遺跡の兼久式土器の実態が把握し辛くなっている。しかし、両分類とも文様を主体とした分類であり、特に熊本大学文学部考古学研究室の分類は、文様による分類を細分類の際にも統一して行っている点が注目される。なお、分類された土器群の中で主体を占める土器群についても分析されている。遺跡で主体を占める土器を示すことは遺跡の土器の実態を示すことにもつながり重要である。このような分析は、同じ分類基準による同じ比率分析を他遺跡でも行なうことが重要である。

用・ミサキ遺跡では、兼久式土器以外の土器も確認されている。一つ目の土器として、熊本大学文学部考古学研究室の調査の際にアカジヤンガー式土器と比定された土器がある。しかし、その後この土器は小湊・フワガネク（外金久）遺跡において大量に出土しているため、兼久式土器に含まれる土器であると考えられる（高梨 1999a）。二つ目の土器として用・ミサキ遺跡の XVI 層出土土器がある。熊本大学文学部考古学研究室では、兼久式土器に先行土器であると推定している。この土器について、高梨修氏は沖永良部のスセン当式土器の可能性を示唆している（高梨 1999a）。共伴遺物の注目点として、貝札（広田上層式）が兼久式土器と共にすることが初めて確認されたことがあげられる。また、兼久式土器と開元通宝との共存の可能性もしめされている。このような開元通宝との共存は、面縄第一貝塚でも確認されている。用・ミサキ遺跡の開元通宝は、VI 層の最下部であるため出土層は保留されているが注目すべき点であろう。数回にわたる用・ミサキ遺跡の発掘調査を整理してみると、用・ミサキ遺跡の成果が多数確認できる。

1997 年に大西智和氏は、奄美諸島で出土した兼久式土器の定義・分類・時期などに関する研究史の

整理を行なっており、兼久式土器に有効な分類に用いることが可能な属性の抽出を行なっている。定義について新たに「兼久式土器を底部に木葉痕が付けられた一群の土器」と定義している。しかし、木葉痕を持たない土器に関してもその他の特徴が同様であれば兼久式土器に含まれるとしている。この際、沖縄本島の土器は含めず、沖縄本島などに見られる同様の特徴を有する土器の取り扱いは今後検討したいと述べている。この定義は、中山清美氏の見解とほぼ同じものである（中山 1992a）。また、分類については先行研究の分類をあげ、分類に用いることが可能な属性として、口縁端部の形態・口縁部形態・突帶の有無・突帶の形状・突帶の刺突の有無・突帶の刺突の種類・突帶の刺突の間隔・文様の有無・文様の位置・文様の種類・器面調整の方法・底部の形態・木葉痕の種類などがあると提示している。これらの属性の組合せを検討することにより安定した分類単位を設定し、分類を分析することにより時期差・地域差の検討を行ないたいとしている。また、大西氏は兼久式土器の帰属年代の解明の重要性も示唆している。兼久式土器の時期については7つの例をあげ、兼久式土器の時期を弥生～平安相当の土器であるとしている。また、大西智和氏は型式学的に見た場合、兼久式土器の位置付けは中村直子氏らの奄美における弥生土器の編年のIV類あるいはその後の時期に位置付けられる予測されている。よって、兼久式土器の初現は弥生時代後期、あるいはそれよりもやや後の時期を与えるのが妥当と述べている（大西 1997）。この論文のように先行研究の分類に関して分析を行なう研究はなく、兼久式土器に有効であり兼久式土器全体を網羅する分類を作成する際に行なわれるべき作業であり重要なことである。ただし、兼久式土器の帰属年代の見解については、兼久式土器の使用時期の年代が降ってきてている研究状況と相反する見解を示している。

1997年に発掘された小湊・フワガネク（外金久）遺跡は、遺構・遺物ともに重要な成果をあげた遺跡である（高梨 1999b）。

- 遺跡の規模が広大であり、出土遺物の数量が膨大である。
- 良好な資料が多数出土した。（・兼久式土器・隆帶文を二条廻らせる土器・土師器模倣土器・貝札・貝匙・貝匙未製品・ヤコウガイ有孔製品・鉄製品・割り取りされたヤコウガイ・接合するヤコウガイ破片・石器）
- 良好な遺構が検出された。（堀立柱建物跡・貝匙制作跡・ヤコウガイ大量集積・ヤコウガイ貝穀破片集積）
- 一次調査と二次調査で時間差がある可能性がある。
- 二次調査の一部で包含層の疊重が確認されている。
- 文化層が三層確認されている。（①白磁・類須恵器・滑石製石鍋等出土層、②兼久式土器出土層、③弥生土器出土層）
- 調査方法を緻密な調査方法（全点記録方式）で行なっている。

小湊・フワガネク（外金久）遺跡における成果を整理してみると、兼久式土器を出土する遺跡の認識を塗り替える画期的な成果を数多くあげた遺跡であることが確認でき、土盛・マツノト遺跡・用・ミサキ遺跡に匹敵する遺跡であることが理解できる。

1998年、鹿児島県歴史資料センター黎明館において平成十年度鹿児島考古学会が行なわれた。その際、高梨修氏が小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査について発表を行なっている。小湊・フ

ワガネク（外金久）遺跡の概要を中心に出土土器の編年やヤコウガイの大量集積について分析を行なっている。兼久式土器の分類は文様によりに大別を行なっている。分類は次の通りである（高梨 1998）。

第1類土器：口縁部に沈線文のみを施すもの。

第2類土器・口縁部下（もしくは頸部）に刻目を施した隆帯を1条～2条巡らせて、口縁部のみか隆帯を挟んで口縁部・胴部に沈線文を施すもの。

高梨氏は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡における兼久式土器の出土状態（出土地点の違いと層の違い）により、第1類土器の方が第2類土器に比べて古いと推測している。また、他遺跡の兼久式土器との比較も行っており、この分類が兼久式土器の二つの段階を構成している土器群であることが確認できると提示している。また、共伴遺物の検討や土盛・マツノト遺跡出土土器の検討（高梨 1993・1995）により、兼久式土器全体を視野に入れた五段階の土器変遷を推測している。土器変遷作成に使用した土器は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器と土盛・マツノト遺跡出土土器である。兼久式土器の変遷は、（沈線文）→（刻目隆帯+沈線文）→（無文の刻目隆帯）→（貼付位置が下がる刻目隆帯）→（隆帯文）という五段階の土器変遷を示され、変遷の方向性は矢印のようになる。1993・1995年に高梨氏が推測した装飾の簡素化の方向性ともほぼ一致する（高梨修氏 1993・1995）。兼久式土器の年代幅については、共伴遺物（笛貫式土器・開元通宝・類須恵器）との関係により、6～10世紀と推測されている（高梨 1998）。高梨氏も述べているが、この年代認識は和野・長浜金久遺跡の編年案とほぼ同じ認識である（弥栄 1985）。この高梨氏の発表は、1993・1995年に高梨氏が行なった土盛・マツノト遺跡の分類と小湊・フワガネク（外金久）遺跡で高梨氏が行なった分類との比較検討により具体的な土器変遷を作成している。二つの分類の細かな分類基準は相違するが、高梨氏が土盛・マツノト遺跡で行なった分類と小湊・フワガネク（外金久）遺跡で行なった分類は、分布論・型式論的研究方法（特に山内清男氏の土師器の研究方法）を基本としている点で一貫している。また、高梨氏は土盛・マツノト遺跡で指摘した発掘調査の徹底の必要性を小湊・フワガネク（外金久）遺跡で実際に行なっており、今後の資料分析により、より多くのことが確認されると思われる。

1999年名瀬市教育委員会は、研究者から指摘をうけている小湊・フワガネク（外金久）遺跡の重要性を認識しシンポジウムを開催した。『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学—』と題されたシンポジウムは、その名の通り考古学の視点だけでなく古代史の視点も含む内容のものであった。

このシンポジウムにおいて高梨修氏は「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」の発表を行なっている。この発表で高梨氏は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の出土土器を理解するために兼久式土器の比較検討を行なっている（高梨 1999a）。先行研究を整理することにより、外来土器と共に土器群の吟味を行なう必要性があり、土器群相互における相対的比較検討の実施や考古学的相対年代の決定の重要性を示唆し、全点記録方式（分布論）の実施の重要性等様々な問題提起をしている。また、高梨氏のこの指摘は1993・1995年にすでに問題提起しているものである。兼久式土器の分析は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡と土盛・マツノト遺跡を相対比較している。この方法は、高梨氏が1998年に行なった方法と同じであり、限界があると提示しながらも、1998年の結果をもとに各遺跡の年代設定が行なわれている。その年代は次の通りである。用・

ミサキ遺跡が7世紀前後、土盛・マツノト遺跡下層が6～7世紀、上層が8～9世紀、万屋・泉川遺跡が9世紀前後、小湊・フワガネク（外金久）遺跡が6～7世紀、和野・長浜金久遺跡（第I遺跡）は全段階（7～9世紀頃）と推定されている。また、堂込秀人氏の「弥生時代の沈線文土器」が「兼久式土器の沈線文のみの土器」へ移行していくという見解に対し、兼久式土器に先行する土器群「スセン当式土器」の存在を提示して疑問を示している。また、用・ミサキ遺跡VI出土の土器、名瀬市小宿・フーバマ（大浜）遺跡出土土器が「スセン当式土器」に類似すると提示している。また、兼久式土器の年代がこのように従来の認識より新しく設定されることにより、共伴遺物である貝札等の年代の再考の必要性も提示している。なお、貝札の年代が弥生時代相当期から古墳時代相当期に設定されると沖縄の土器編年にも影響を及ぼすと述べている。高梨氏は、兼久式土器の古い段階と並行関係にある沖縄の土器は、貝塚時代後期土器いわゆる尖底土器である可能性があると示唆しており、沖縄・貝塚時代後期の尖底土器からいわゆるくびれ平底へ変化する時期についても兼久式土器の研究は手がかりになる可能性があると指摘している。高梨氏は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の成果により従前の調査の再検討が飛躍的に進むであろうと予見している（高梨 1999a）。

高梨氏は、この発表により兼久式土器の変遷・時期を、小湊・フワガネク（外金久）遺跡や土盛・マツノト遺跡の資料により設定し、他遺跡の年代設定を行なっている。その結果、兼久式土器は従来の「弥生時代後期から平安時代」という時代認識に対し「6世紀から10世紀」とより新しい時代でより短期間使用の土器になることを指摘している。また、古墳時代前半段階相当期の奄美諸島の土器が空白になるという事象に対しては、沖永良部・スセン当式土器がこの古墳時代前半段階相当土器に設定されうるのではないかとの予見している。この発表は、先行研究の長期間の時間設定に対し、小湊・フワガネク（外金久）遺跡や土盛・マツノト遺跡の資料を型式学・層位学・分布論的研究で分析し、新たな時期設定を提示している点が重要である。高梨氏は小湊・フワガネク（外金久）遺跡の成果により、自説（兼久式土器は従前認識よりも新しい時期の土器）を確認し、新たな年代を設定している。これらのことにより、兼久式土器の研究に飛躍的成果が見られ、現段階では高梨氏の研究方法が兼久式土器の研究を行なう際に最も有効な研究方法であると考えられる。

小湊・フワガネク（外金久）遺跡は、1997年に名瀬市教育委員会により発掘調査が行われ、1999年に発掘調査概報が報告されている（高梨 1999b）。

調査地点は一次調査地点と二次調査地点があり、それぞれにヤコウガイを大量集積している部分と兼久式土器の出土が見られ、土師器の模倣土器も出土している。小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器は文様と出土地点により二つに分類されており、第1類が沈線文のみの土器、第2類土器はその他の兼久式土器である。第1類土器（沈線文のみ）は、二次調査地点でのみ出土しており一次調査地点では確認されていないので、高梨氏は共伴遺物である貝札の文様構成の相対的比較や出土状態等の相違により、第1類土器の方が第2類土器より古く位置づけられる可能性を指摘している（高梨 1999b）。なお、小湊・フワガネク（外金久）遺跡において主体となる土器は第2類土器である。高梨氏は、1998・1999年の発表と小湊・フワガネク（外金久）遺跡の調査成果の分析により、遺跡間の比較検討を行なっており、第1類土器は大半の遺跡で確認できず第2類土器は他遺跡でもよく確認されていると指摘している。また、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の第2類土器と他の遺跡の第2類

土器類似土器が相違する点として口唇部の刻目があることを指摘している（高梨 1999b）。1999 年のシンポジウムの資料によると、小湊・フワガネク（外金久）遺跡では口唇部に刻目を有する土器が多く出土しているのが確認でき、第 1 類土器にも口唇部の刻目が確認できる（高梨 1999a）。この口唇部に刻目を有する土器は、用・ミサキ遺跡で類似する土器が確認できる。しかし、熊本大学文学部考古学研究室では、この口唇部に刻目を施す土器を沖縄の「アカジャンガー式土器」に比定している（熊本大学文学部考古学研究室＜藤江＞1996・＜小倉＞1997）。また、この口唇部の刻目に関しては河口貞徳氏の 1974 年の論文でも兼久式土器の特徴のひとつに口唇部の刻目があげられている（河口 1974）。小湊・フワガネク（外金久）遺跡の出土土器により、用・ミサキ遺跡の口唇部に刻目を施す土器も兼久式土器と比定されると推測できる。また、調査方法も注目すべき点としてあげられる。小湊・フワガネク（外金久）遺跡以前の調査では大半の出土遺物を層ごとで記録されていたが、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の調査においては土器・ヤコウガイ・礫・貝札・貝匙・ヤコウガイ有孔製品・鉄製品など多数の遺物において全点記録方式で記録を行なっている。このことにより出土遺物が垂直分布・平面分布に確認でき、出土遺物の一括性や分布を確認することができる。

2000 年、中山清美氏は奄美諸島の考古学研究の現状についてまとめた論文を発表した。この論文で中山氏は土盛・マツノト遺跡出土遺物の分析を行なった結果、兼久式土器の年代について 6 世紀から 11 世紀頃にかけての土器であると発表しており（中山 2000）、それまでの弥生時代後期から平安時代という年代理解（中山 1995b）を変更している。それは、高梨修氏の年代理解の 6 世紀から 10 世紀（高梨 1999a）に類似している。

2000 年、高梨修氏は小湊・フワガネク（外金久）遺跡の成果により古代におけるヤコウガイ遠隔地交易（需要地・供給地）に小湊・フワガネク（外金久）遺跡を代表とするヤコウガイ大量出土遺跡（高梨 2000）が関わる可能性を指摘した。高梨氏はここでも兼久式土器のことに触れているが、高梨氏が 1998・1999 年に発表した論文と同じ見解である（高梨 1998・1999a・1999b）。

3 兼久式土器の抱えている問題点

兼久式土器に関する報告書・論文を年代順に羅列し研究略史を整理したが、兼久式土器は未だに数多くの問題を抱えていることが確認できた。そこで、兼久式土器研究が抱えている問題点の抽出を行ないたい。

- (1) 兼久式土器の定義として、河口貞徳氏が兼久式土器の特徴を提示して以降、兼久式土器の定義付けらしきものはほとんどなされていない。今日では、河口氏が提示した兼久式土器の特徴にあてはまらない土器も出土し、兼久式土器の実態が未だに把握されていないことがわかる。このことは中山清美氏が「どこまでが兼久式土器なのかの判断は各調査者にまかされていよう。」（中山 1984）と提示し、高梨修氏が「いわゆる兼久式土器は難解なる土器として受け止められている。兼久式土器の実態が曖昧模糊としており、定義が判然としていないからである。」（高梨 1999a）と提示しているように兼久式土器の実態・定義が判然としていないのが現状である。
- (2) 各遺跡・研究者で分類が作成されていて、兼久式土器全体を総括する分類が無い。また、分類・分析の大半が各遺跡・研究者の研究で終始しており、相対的比較が行なわれていない。このことは兼久式土器の実態が判然としない原因の一つである。

- (3) 兼久式土器の帰属年代は弥生時代後期から平安時代と年代幅が広い。兼久式土器の帰属年代は河口貞徳氏が「石斧を伴わないこと」「弥生式土器の終末期の土器の影響で底部に木葉圧痕を有すること」等の特徴により弥生時代後期（河口 1974）と設定したことに始まり、弥生時代後期から7世紀（牛の浜・堂込 1983）、古墳時代後期以降（池畠 1984）、弥生時代後期から平安時代（中山 1992）、7世紀から10世紀（弥栄 1984）、古墳時代から平安時代（戸崎・長野 1987）、弥生時代後期（あるいはやや降る時代）から平安時代（大西 1997）、6世紀から10世紀（高梨 2000）、6世紀から11世紀（中山 2000）と様々であり兼久式土器の帰属年代は未だ定かではない。
- (4) 兼久式土器の特徴として、装飾性に乏しく器形の差異も乏しいことが挙げられる。また、層位的疊重を持つ遺跡が希少である（高梨 1995）。それらの特徴から兼久式土器は、型式学的研究を行いにくく層位学的比較研究も行ないにくい資料である。
- (5) 兼久式土器に伴う共伴遺物に成川式土器・貝札等があるが、これら共伴遺物の帰属年代も判然としない部分が多い。まず、成川式土器（笹貫式土器）の帰属年代であるが、中村直子氏によると、「成川式のうちでもっとも新しい段階をいわゆる笹貫式とする見解は広く受け入れられているようである。しかし、その笹貫式の実年代については5~6世紀とするものから7~8世紀とするものまでさまざまである。」とされており（中村 1987）未だ判然としないことが理解できる。次に貝札の帰属年代であるが、貝札は今まで弥生時代並行期の資料と認識してきた（中山 1992）。しかし、高梨修氏が1999年に兼久式土器の分析により古墳時代後期並行期以後に比定される可能性を示唆している（高梨 1999a）。このことから貝札も帰属年代が判然としていないことが理解できる。以上、兼久式土器に伴う共伴遺物は未だ年代が判然としないものが多いことが確認できる。
- (6) 兼久式土器の発掘調査方法は、層ごとによる一括記録が大半であり出土資料の垂直分布・平面分布が不明である。層ごとの発掘調査では共伴遺物の一括性が有効であるか等、資料の記録方法が不十分である。そこで、全点記録方式など調査方法の徹底の必要性がある。
- (7) 土盛・マツノト遺跡の放射性炭素年代測定法の結果が下層より上層の年代が古いとの測定結果がでるなど、放射性炭素年代測定法の検討も慎重に行なうべきで、放射性炭素年代測定法のみによる年代設定が行なわれている遺跡などは、慎重に検討する必要がある。
- このように兼久式土器には、問題点が多数認められる。そこで本稿では、兼久式土器研究の抱えている問題点の中で特に重要であると考えられる兼久式土器の実態をつかむ作業を行いたい。作業方法としては、現段階の先行研究のなかで兼久式土器の実態をつかむのに有効であると思われる高梨修氏の問題認識に従いながら型式学的研究の基礎となる分類案の作成を行ないたい。
- 今回、小湊・フワガネク（外金久）遺跡を分析する機会に恵まれた。そこでまず、小湊・フワガネク（外金久）遺跡という兼久式土器の質・量・分布状態が極めて良好な（一括）資料を、文様を中心とした属性で分析し分類を行い、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器の実態をつかみたい。この作業により導き出された兼久式土器の実態を基軸として他遺跡出土の兼久式土器と比較検討を行なうことは、兼久式土器全体のある一時期の土器との比較検討を行なうことになる。よって、比較資料が兼久式土器全体のどの位置に位置付けられるかが判明する、この作業を繰り返すことにより兼久式土器全体の実態がつかめると考えられる。また、小湊・フワガネク（外金久）遺跡を基軸に

他の遺跡（一括）資料を分析することにより、兼久式土器全体を総括する分類を作成することにもつながると考えられる。

以上の点から本稿では、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器を中心として、兼久式土器研究に有効な分類を行ない、それを踏まえた上で兼久式土器の実態解明や型式学的研究を進めていく上で基礎となる、兼久式土器全体を網羅する土器分類案の作成を行いたい。

今回、兼久式土器の分類を作成する上で、小湊・フワガネク（外金久）遺跡から出土した兼久式土器 105 点を使用した。検討対象資料として兼久式土器の甕形土器口縁部のみを対象とした。検討対象資料の選出は沈線文のみの土器は発見できうるすべての資料を対象とし（27 点）、他の資料は残存状態が良好な破片を任意に取り出して実測を行なった。実測に際しては、文様に重点を置き、器面調整に関しては今回除外した。また、文様に重点を置いているため実測図は土器破片を復元器形の中央に配置し、大半は土器の外面のみを実測することにした。個体における文様の施文位置については、内面を 1 文様帶、口唇部を 2 文様帶、口唇部から横位方向隆帶文までを 3 文様帶、横位方向隆帶文上を 4 文様帶、横位方向隆帶文以下の胴部を 5 文様帶とし、文様帶を区分する（図 1）。

他遺跡の資料については、報告書に掲載された図面をそのまま使用することとした。その際の選出方法は、原則として口径が復元できるものを選出した。検討対象資料は、万屋・泉川遺跡 10 点、和野・長浜金久遺跡 38 点、用・ミサキ遺跡 36 点、各遺跡の出土土器の分析方法は小湊・フワガネク（外金久）遺跡で行なう方法と同じ方法である。

小湊・フワガネク（外金久）遺跡から出土した兼久式土器については、今回小湊・フワガネク（外金久）遺跡の整理作業に参加させていただく機会に恵まれ、私が出土土器の実測作業に関与することができた。名瀬市教育委員会のご高配をいただき、未報告にもかかわらず分析資料として使用・発表を許可していただいたものである。

第二章 兼久式土器の分析

1 小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の分析

① 小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の分類作業

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器から文様を中心とした分類案を作成してみることにする。兼久式土器の文様は主として、沈線文・隆帶文で構成されることから、文様の組合せと施文部位により分類を試みることにする。細分類については、口縁部近くの横位方向隆帶文の形状や貼り付け位置に重点をおいて分類を行なうこととする。

では、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器全体の文様分類案の検討作業を進めしていく。この分類作業について、以下で説明を加えていく。

先ず小湊・フワガネク（外金久）遺跡の出土土器は、文様の有無により無文と有文に分けることができる。今回、実測を行なった数量によると、無文土器（図 3）が 15 点、有文土器（図 4～12）が 90 点で、小湊・フワガネク（外金久）遺跡では、圧倒的に有文が多数を占める可能性があることがわかる（甕形土器口縁部のみを対象とする）。

また、有文土器は沈線文と隆帶文の組合せで細分を行なうことができる。先ず、隆帶文を施さない土器（沈線文のみを施す土器）27点（図4）と隆帶文を施す土器63点（図5～12）に分けることができる。土器の点数のみを比較すると、小湊・フワガネク（外金久）遺跡における沈線文のみの土器と隆帶文を施す土器との割合は、約1:2のように思える。しかし、今回の実測では沈線文のみの土器は確認できうるかぎりの土器の実測を行い、その他の土器については、残存状態の良好な大破片から順次実測を行なったため、小湊・フワガネク（外金久）遺跡全体における土器の割合として、実際の在り方としては沈線文のみの土器が少量であることが推測できる。また、沈線文のみの土器は小湊・フワガネク（外金久）遺跡において第二次調査地点のみに出土しており第一次調査地点では確認されていない（高梨1999b）ことからも、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の中で、明らかに他の土器と相違する土器であると推測できる。

次に、隆帶文を施す土器について、口縁部近くの横位方向隆帶文の有無で分けることができる。口縁部近くに横位方向隆帶文を一条巡らせる土器は60点であるが（図5～9）、口縁部近くに横位方向隆帶文を施さない土器は3点しか確認できなかった（図10～12）。小湊・フワガネク（外金久）遺跡の隆帶文を施す土器群の中で、口縁部に横位方向隆帶文を巡らせない土器は主流を占めていないことが推測される。さらに、口縁部近くに横位方向隆帶文を施さない土器は、隆帶文の形状により二つに分けることが可能である。縦位方向隆帶文を口縁部に施すものと耳状（逆U字状）隆帶文を口縁部に施すものである。縦位方向隆帶文を口縁部に施す土器は1点で（図10）、耳状隆帶文を口縁部に施すものは2点（図11～12）であった。

口縁部に横位方向隆帶文を施す土器は、沈線文と隆帶文の組合せにより分けることが可能である。沈線文のみの土器は、出土地点の相違も検討して分類を行なったため、ここでは、隆帶文のみを施す土器と隆帶文+沈線文の土器に細分類を行なうこととする。口縁部近くに横位方向隆帶文を施す土器群では、隆帶文のみを施す土器が6点確認されており（図5）、隆帶文+沈線文は54点確認した（図6～9）。この結果、隆帶文+沈線文の土器群は小湊・フワガネク（外金久）遺跡の実測土器全体（105点）のほぼ半数を占めることが認められる。このことから、隆帶文+沈線文の土器群は小湊・フワガネク（外金久）遺跡で主流を占めている土器群であると推測される。また、口縁部近くに横位方向隆帶文を施さない土器群においても同様に沈線文と隆帶文の組合せにより分けることが可能である。縦位方向隆帶文を施す土器群においては、縦位方向隆帶文のみの土器群と、縦位方向隆帶文+沈線文の土器群に細分類できる。耳状隆帶文を施す土器群においては、耳状隆帶文のみの土器群と耳状隆帶文+沈線文の土器群に細分できる。しかし、実際に確認できた土器群では、縦位方向隆帶文+沈線文の土器群（図10）、耳状隆帶文のみの土器群（図12）、耳状隆帶文+沈線文の土器群（図11）はそれぞれ1点確認できたが、縦位方向隆帶文のみの土器群は確認できなかった。

口縁部近くに横位方向隆帶文を一条巡らせる土器群は、さらなる細分類を行なうことが可能である。先ず、隆帶文+沈線文の土器群は沈線文の施文位置の範囲により細分類が可能である。施文位置の範囲は文様帯を区分した（図1）。この文様帯区分によると、沈線文が3文様帯に施文される土器群（横位方向隆帶文上部のみ）（図6・7）と、沈線文が3ののみでなく5文様帯にまで施文される土器群（横位方向隆帶文の上下部に沈線文を施す）（図8・9）がある。数量に関しては、横位方向隆帶文の上部

にのみ沈線文を施す土器群（3 文様帯のみ）が 32 点、横位方向隆帶文の上下部に沈線文を施す土器群（3・5 文様帯）が 22 点どちらも数量が多いことが確認できる。

また、横位方向隆帶文を施す土器群は、少數ながら縦位方向隆帶文を伴うものが確認できる。そこで、横位方向隆帶文+縦位方向隆帶文の観点からも細分類を行なってみたい。隆帶文のみを施す土器群では、縦位方向隆帶文を施す土器群は確認できなかった。なお、横位方向隆帶文の上部にのみ沈線文を施す土器群（3 文様帯のみ）でも、縦位方向隆帶文を施す土器群は確認できなかった。しかし、横位方向隆帶文の上下部分に沈線文を施す土器群（3・5 文様帯）においては、縦位方向隆帶文を施す土器群が確認でき、縦位方向隆帶文を施す土器群（図 9 の 20・21・22）は 3 点確認できた。なお、横位方向隆帶文の上下部分に沈線文を施す土器群（図 8・9 の 18・19）の中で縦位方向隆帶文を施さない土器群については 19 点が確認できた。このことから、隆帶文のみの土器群、横位方向隆帶文の上部のみに沈線文を施す土器群（3 文様帯のみ）、横位方向隆帶文の上下部に沈線文を施す土器群（3・5 文様帯）ともに、縦位方向隆帶文を施す土器は少數であることが確認できる。

② 小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の分類案

前述の分類作業に基づいて、文様分類案（図 2）を作成した。その結果、小湊・フワガネク（外金久）遺跡における兼久式土器は、次のように分類される。各分類を整理しつつ記号化を行いたい。

○文様の有無により、無文土器を I 類、有文土器を II 類とする。

- ・ I 類…無文土器
- ・ II 類…有文土器

○II 類土器はさらに隆帶文の有無により、沈線文のみの土器（II-A 類）と隆帶文を施す土器（II-B 類）に分けることが可能である。

- ・ II-A 類…沈線文のみの土器
- ・ II-B 類…隆帶文を施す土器

○II-B 類はさらに口縁部近くに横位方向隆帶文を施すか施さないかにより、口縁部近くに横位方向隆帶文を一条巡らせる土器（II-B-a 類）と口縁部近くに横位方向隆帶文を巡らせない土器（II-B-b 類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a 類…口縁部近くに横位方向隆帶文を一条巡らせる土器
- ・ II-B-b 類…口縁部近くに横位方向隆帶文を巡らせない土器

○II-B-b 類は隆帶文の形状により、縦位方向隆帶文を口縁部に施す土器（II-B-b- α 類）と耳状隆帶文を口縁部に施す土器（II-B-b- β 類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-b- α 類…縦位方向隆帶文を口縁部に施す土器
- ・ II-B-b- β 類…耳状隆帶文を口縁部に施す土器

○II-B-b- α 類は、口縁部に縦位方向隆帶文のみを施す土器（II-B-b- α -1 類）と口縁部に縦位方向隆帶文と沈線文を施す土器（II-B-b- α -2 類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-b- α -1 類…口縁部に縦位方向隆帶文のみを施す土器
- ・ II-B-b- α -2 類…口縁部に縦位方向隆帶文と沈線文を施す土器

○II-B-b- β 類は、口縁部に耳状隆帶文のみを施す土器（II-B-b- β -1 類）と口縁部に耳状隆

帶文と沈線文を施す土器（II-B-b-β-2類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-b-β-1類…口縁部に耳状隆帶文のみを施す土器
- ・ II-B-b-β-2類…口縁部に耳状隆帶文と沈線文を施す土器

○ II-B-a 類は、隆帶文と沈線文の組合せにより、口縁部に隆帶文のみを施す土器（II-B-a-1類）と口縁部に隆帶文と沈線文を施す土器（II-B-a-2類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a-1類…口縁部に横位方向隆帶文のみを施す土器
- ・ II-B-a-2類…口縁部に隆帶文と沈線文を施す土器

○ II-B-a-1類には、縦位方向隆帶文を伴う土器も存在する。よって、II-B-a-1類は縦位方向隆帶文の有無により、縦位方向隆帶文を施す土器（II-B-a-1-イ類）と縦位方向隆帶文を施さない土器（II-B-a-1-ロ類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a-1-イ類…II-B-a-1類に縦位方向隆帶文を施す土器
- ・ II-B-a-1-ロ類…II-B-a-1類に縦位方向隆帶文を施さない土器

○ II-B-a-2類は、沈線文の施文位置により、横位方向隆帶文の上部のみに沈線文を施す（3文様帶のみ）土器（II-B-a-2-①類）と横位方向隆帶文の上下部分に沈線文を施す（3・5文様帶）土器（II-B-a-2-②類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a-2-①類…横位方向隆帶文の上部のみに沈線文を施す土器
- ・ II-B-a-2-②類…横位方向隆帶文の上下部に沈線文を施す土器

○ II-B-a-2-①類には、縦位方向隆帶文を伴う土器が存在する。よって、縦位方向隆帶文の有無により、縦位方向隆帶文を施す土器（II-B-a-2-①-イ類）と縦位方向隆帶文を施さない土器（II-B-a-2-①-ロ類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a-2-①-イ類…II-B-a-2-①類に縦位方向隆帶文を施す土器
- ・ II-B-a-2-①-ロ類…II-B-a-2-①類に縦位方向隆帶文を施さない土器

○ II-B-a-2-②類には、縦位方向隆帶文を伴う土器が存在する。よって、縦位方向隆帶文の有無により、縦位方向隆帶文を伴う土器（II-B-a-2-②-イ類）と縦位方向隆帶文を施さない土器（II-B-a-2-②-ロ類）に分けることが可能である。

- ・ II-B-a-2-②-イ類…II-B-a-2-②類に縦位方向隆帶文を施す土器
- ・ II-B-a-2-②-ロ類…II-B-a-2-②類に縦位方向隆帶文を施さない土器

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器は、前述のように分類を行なうことができる。

文様分類の結果を考察すると、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器は、II-B-a-2類が大半を占めていることが確認できる。また、横位方向隆帶文を施さない土器や、横位方向隆帶文に縦位方向隆帶文を施す土器は、少量であることが確認できた。このことから、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の出土土器は、II-B-a-2類を主体とした土器群であることが推考できる。

本論ではこれ以降、文様分類案の土器群を示す際は記号で示すこととする。

③ 小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の口唇部刻目の検討

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器の特徴の一つである、口唇部の刻目は文様の一部と考えられ、文様帶の2文様帶にあたる。今後の文様分類に一属性として使用できる可能性があり、

兼久式土器の実態をつかむ有効な属性の一つであると考えられる。よって、本節では兼久式土器の口唇部の刻目の有無について分析を行ないたい。

今回、小湊・フワガネク（外金久）遺跡で検討対象資料とした兼久式土器の口唇部の刻目の有無の比率は、刻目有りが 46 点、刻目無しが 59 点であり、刻目有り : 刻目無し = 3 : 4 である（表 1）。対象資料の結果より、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の有文土器の約半数が口唇部に刻目を有していることが推測できる。それでは、各文様分類での比率はどうであろうか、刻目の有無と文様分類との関係を分析することにする（表 2）。文様分類の分析は、分類案の I 類・II-A 類・II-B-a-1 類・II-B-a-2-①類・II-B-a-2-②類の分類レベルで行なうこととする。その際、II-B-b 類の土器群は資料数が少量であるため、分析対象から除外した。

各文様分類の土器群における刻目の有無の点数は（有り : 無し）、I 類が 0 : 15、II-A 類が 16 : 11、II-B-a-1 類が 0 : 6、II-B-a-2-①類が 16 : 16、II-B-a-2-②類が 14 : 8 を示し、各文様分類により刻目の有無の割合が相違することが確認できた。特に、I 類や II-B-a-1 類の土器群では口唇部に刻目を有する土器が存在しないことが推測される。表 2 で確認すると、刻目を有しない土器で構成されている土器群（I 類・II-B-a-1 類）が存在することが確認できる。小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器で実測した土器の口唇部の刻目の有無は、有り : 無し = 3 : 4 であり、口唇部に刻目を有する土器が半数近くにのぼることが確認できた。実測土器全体量に対する I 類の割合が約 14%、II-B-a-1 類の割合が約 6%、I 類と II-B-a-1 類を合わせると実測土器全体量の 20% にも上る。したがって、これら I 類や II-B-a-1 類の土器に口唇部に刻目を持つ土器が皆無である事は疑問である。

では、何故 I 類や II-B-a-1 類の土器は口唇部に刻目を施さないのであろうか。この両者とその他の土器の相違は、沈線文の有無つまり装飾性に乏しいことが指摘できる。そこで、各文様分類の施文位置を確認してみることにする。図 1 の文様帶による検討を行なうと、I 類は無文土器であるため当然のことながら施文位置が無い。また、II-B-a-1 類の施文位置は 4 文様帶のみである。これらは、文様を施している施文幅が狭く装飾性に乏しいことが確認できる。では他の文様分類ではどうであろうか、II-A 類の施文位置は 1~3・5 文様帶（1 文様帶・2 文様帶は一部の土器のみ、4 文様帶は無し）、II-B-a-2-①類の施文位置が 2~4 文様帶（2 文様帶は一部の土器のみ）、II-B-a-2-②類の施文位置が 2~5 文様帶（2 文様帶は一部の土器のみ）となり、I 類・II-B-a-1 類以外の土器は施文位置が広いことが確認できる。施文位置の広い順に文様分類を並べてみると、II-B-a-2-②類 > II-A 類 > II-B-a-2-①類 > II-B-a-1 類 > I 類の順となる。

そこで、各文様分類の口唇部の刻目の割合を、前述の施文位置の広い文様分類の順に確認してみることにする。すると、II-B-a-2-②類の刻目有りの割合は約 70%、II-A 類の刻目有りの割合は約 60%、II-B-a-2-①類の刻目有りの割合は 50%、II-B-a-1 類の刻目有りの割合は 0%、I 類の刻目有りの割合は 0% と施文幅が広い土器ほど口唇部に刻目を有する割合が高いことが確認できる。このことから、施文範囲の広い土器ほど口唇部の刻目が多く施文されると推測できる。施文範囲が広いほど口唇部の刻目の割合が高くなることから文様の盛衰との関わりも推測できる。口唇部の刻目の割合は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の兼久式土器の細分に有効な属性であると考察され、

当該事実は、口唇部の刻目に関して、極めて注目される点である。

④ 小結

諸属性から分析を積み重ねてきたが、これらの分析結果より、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の出土土器の特徴を据えることができたと考えられる。整理しながら列記してみたい。

○小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器では、分類案におけるII-B-a-2類が大半を占める土器である。

○小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の口唇部刻目の有無は、有：無=3:4であり口唇部に刻目を施す土器が半数近くを占める。また、I類とII-B-a-1類では口唇部に刻目を施さない。また、施文範囲が広い土器ほど口唇部に刻目を施す割合が高いことが言える。これは、極めて注目される事実である。

以上が、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器における分析結果からまとめた土器の特徴である。当該分析は、他の兼久式土器出土遺跡でも同様に実施するが、特に分析視点を文様分類に絞って行なうこととする。

2 奄美における兼久式土器出土主要遺跡の分析

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の分析作業を通して、兼久式土器分類に有効であると考えられる分類案が作成できた。本節では他遺跡から出土している兼久式土器についても、同様の分析を試みてみたい。

今回、分析を実施した遺跡は、用・ミサキ遺跡、和野・長浜金久遺跡、万屋・泉川遺跡である。特に用・ミサキ遺跡は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡とほぼ同じ文様分類の土器群であると考えられ、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器で作成した分類案が同じ兼久式土器の文様分類の土器群を持つ遺跡の中で、どの程度の有効性を示すのかを確認する好資料であると考えられる。

分析する属性・分類案は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡で抽出した、(a)文様分類・(b)口唇部の刻目である。また、文様分類の分析は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡で作成した文様分類案における、I類・II-A類・II-B-a類・II-B-b類の分類レベルと、II-B-a類を細分した分類レベルのII-B-a-1類・II-B-a-2類により分析を行ないたい。

① 万屋・泉川遺跡出土土器の分析

最初に、万屋・泉川遺跡について分析することとする（図13～17）。

(a) 文様分類

万屋・泉川遺跡で対象とした兼久式土器の点数は10点である。文様分類による比率は、I類が2点、II-A類が1点、II-B-a類が6点、不明が1点である。万屋・泉川遺跡においてもII-B-a類が多数を占めることができ確認できる。では、II-B-a類の細分による数量はどうであろうか、II-B-a類の数量は、6点である。II-B-a-1類の数量は5点、II-B-a-2類の数量は1点、とII-B-a-1類の割合が大半を占めることができる。

(b) 口唇部刻目

万屋・泉川遺跡では、口唇部の刻目は確認できなかった。

まとめ

以上の結果より、万屋・泉川遺跡の土器の特徴を上げてみたい。

○文様分類では、II-B-a-1類が大半を占める。

○口唇部の刻目は確認できなかった。

万屋・泉川遺跡は、資料数は少ないが、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器と相違する結果が認められた。

② 和野・長浜金久遺跡出土土器の分析

次に、土器の種類が多い和野・長浜金久遺跡の分析を行いたい（図18～22）。

(a) 文様分類

和野・長浜金久遺跡で対象とした兼久式土器は38点である。和野・長浜金久遺跡における文様分類による数量比を見てみたい。I類・II-A類・II-B-a類・II-B-b類の分類レベルで数量比を見てみると、I類が16点、II-A類が2点、II-B-a類が19点、II-B-b類が1点の合計38点確認できた。和野・長浜金久遺跡で数量が多い文様分類は、I類とII-B-a類である。II-B-a類を細分したII-B-a-1類とII-B-a-2類で分析してみると、II-B-a-1類の数量が14点、II-B-a-2類が5点であった。

(b) 口唇部刻目

口唇部の刻目について、和野・長浜金久遺跡で対象とした土器では、口唇部に刻目を施す土器は確認できなかった。

まとめ

以上の結果より、和野・長浜金久遺跡の土器の特徴をあげてみたい。

○文様分類では、II-B-a-1類が大半を占める。

○口唇部の刻目は、確認できなかった。

和野・長浜金久遺跡においても、小湊・フワガネク（外金久）遺跡と相違する結果が確認できた。しかし、和野・長浜金久遺跡と万屋・泉川遺跡については、類似する分析結果が確認できる。

③ 用・ミサキ遺跡出土土器の分析

最後に、用・ミサキ遺跡の兼久式土器の分析を行なう。用・ミサキ遺跡の土器は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の兼久式土器と文様分類における土器の組合せにおいて類似する土器群である（図23～28）。

(a) 文様分類

用・ミサキ遺跡で対象とした兼久式土器は36点である。用・ミサキ遺跡の兼久式土器を文様分類ごとに数量を計測してみると、I類は7点、II-A類は0点、II-B-a類が29点、II-B-b類が0点で、合計36点であり、II-B-a類が大半を占めることができ確認できる。では、II-B-a類を細分して数量を計測してみると、II-B-a-1類が7点、II-B-a-2類が22点を示し、II-B-a-2類が全体の約4/7を占めることができる。

(b) 口唇部刻目

用・ミサキ遺跡では、報告書で口唇部に刻目を持つ土器片が確認できるが、今回分析対象とした土器においては確認できなかった。また、この土器は熊本大学文学部考古学研究室の報告で沖縄のアカ

ジャンガー式土器に比定されている土器である（熊本大学文学部考古学研究室 1996・1997）。

まとめ

以上、用・ミサキ遺跡の土器の特徴をあげてみる。

○文様分類では、II-B-a-2類が全体の約4/7を示す。

○口唇部の刻目は、今回取り上げた検討資料の中では確認できなかった。しかし、用・ミサキ遺跡においては、この口唇部に刻目を持つ土器が確認されている。

用・ミサキ遺跡においては、小湊・フワガネク（外金久）遺跡と類似する分析結果が確認できた。しかし、万屋・泉川遺跡、和野・長浜金久遺跡とは相違する分析結果となった。

それでは、次節において各遺跡の分析結果の検討を行ないたい。

3 分析結果の検討

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の分類作業を基準としながら、当該分析方法を奄美における兼久式土器出土遺跡の主要資料にまで広げて検討を進めてきた。分析結果の検討を行い、兼久式土器に対する理解を深めてみたい。

①兼久式土器の再分類

小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器を中心に、兼久式土器について、文様分類案を作成した。兼久式土器の文様は、沈線文・隆帶文で構成されることから、文様の組合せと施文部位により分類を行い、細分に関しては、口縁部近くの横位方向隆帶文に重点をおいて分類を行なった。その結果から作成された文様分類案が（図2）である。しかし、この分類にあてはまらない兼久式土器が他の遺跡において確認できた。以下に列記してみることにする。

- ①刻目隆帶文の貼り付け位置が胴部に下がる土器
- ②横位隆帶文+縦位方向隆帶文と横位隆帶文が変化した土器
- ③横位粘土帯+縦位粘土帯+沈線文の土器（沈線文の施文の仕方・文様、粘土帯の雰囲気の違いから、II-B-a-2-②-ロ類とは別の分類であると推測される土器）。

以上が小湊・フワガネク（外金久）遺跡で作成した文様分類案にあてはまらない土器である。この3点の土器は下記の基準により、新たに分類項目を設定し小湊・フワガネク（外金久）遺跡の文様分類案に含めてみたい。

①・②の土器は、II-B-a-1-ロ類の横位方向隆帶文が移動、または、変化したものと推測できる。よって、横位方向隆帶文の位置の変化により、新たに以下のように分類する。

- ・口縁部に横位方向隆帶文が貼り付けられる土器をII-B-a-1-ローあ類とする。
- ・横位方向隆帶文が胴部に貼り付けられる土器をII-B-a-1-ローい類とする。

II-B-a-1-ローあ類・II-B-a-1-ローい類、それぞれの横位方向隆帶文が変化したものしないものに細分できることから、横位方向隆帶文が変化しないものを(a)、横位方向隆帶文が変化したものを(b)とすると、新たな分類設定は以下のようになる。

II-B-a-1-ローあ-(a)類　・口縁部に横位方向隆帶文が貼り付けられ、横位方向隆帶文が変化しないもの

II-B-a-1-ローあ-(b)類　・口縁部に横位方向隆帶文が貼り付けられ、横位方向隆帶文が変化す

るもの

II-B-a-1-ローイー(a)類 ・横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの

II-B-a-1-ローイー(b)類 ・横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの

これらの土器群は、小湊・フワガネタ（外金久）遺跡の文様分類のII-B-a-1類の系統に位置付けられると推測される。よって、文様分類案に新たに加えることにする。

なお、③の土器について、今回の文様分類基準においてはII-B-a-2-②-イ類に含まれることになるが、③の土器の特徴として、沈線文を数本単位で櫛状に施し、隆帯文により文様を施す。この特徴は、II-B-a-2-②-イ類の土器とは明らかに違うため、II-B-a-2-①-イ類に含めるのは保留したい。そのためこの土器は、文様分類では不明とする。

以上の細分類により、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器で確認されていない土器群を含めて文様分類を設定した（図29・表3）。

②分析結果の概要

全体の分析結果については、(a) 文様分類、(b) 口唇部刻目と整理してみたい。

(a) 文様分類

小湊・フワガネク（外金久）遺跡では、II-B-a-2類が大半を占めた。万屋・泉川遺跡及び和野・長浜金久遺跡では、II-B-a-1類が大半を占め、用・ミサキ遺跡では、II-B-a-2類が大半を占めたとの分析結果が確認できた。このことから、遺跡により文様分類の組合せや、主体を占める土器が相違することが確認できた。また、文様分類の組合せが類似する小湊・フワガネク（外金久）遺跡と用・ミサキ遺跡では、主体を占める土器が同じII-B-a-2類であり、小湊・フワガネク（外金久）遺跡では出土しない、II-B-a-1-ローイー(a)類が出土する万屋・泉川遺跡と和野・長浜金久遺跡では、II-B-a-1類が主体を占めるという結果が確認できた。

(b) 口唇部刻目

用・ミサキ遺跡の報告書において二点確認できたが、いずれも小片で文様分類が定かでなく、今回は検討対象から除外した。小湊・フワガネク（外金久）遺跡の口唇部刻目の有無は、有：無=3:4となり、口唇部に刻目を施す土器が半数近くを占める。また、I類とII-B-a-1-ローイー類では口唇部に刻目を施さないことが確認できた。また、施文範囲が広い土器ほど口唇部に刻目を施す割合が高いことが確認できた。

③総括

今回分析を行なった分析結果をまとめてみたい。

○各遺跡において、文様分類ごとに数量を計測すると、各遺跡の出土土器が特定の文様分類に集中することが確認できた。また、文様分類の組合せが類似する土器群を有する遺跡間では、文様分類において集中する土器も類似することが確認でき、文様分類の土器の組合せが相違する土器群を有する遺跡間では、文様分類において集中する土器も相違することが確認できた。

○口唇部の刻目は、用・ミサキ遺跡の報告書において二点確認できたが、いずれも小片で文様分類が定かでないため、今回は検討対象から除外した。よって、小湊・フワガネク（外金久）遺跡のみで分析を行なった。分析結果として、文様の施文範囲が広い土器ほど口唇部に刻目を施す割合が高いという注目すべき事実が確認できた。刻目も文様要素の一つとして、文様構成していると推測できる。今後の兼久式土器研究を進めていく中で、注意していかなければならない属性であると考えられる。

以上が、今回実施した土器分類と属性分析の結果である。兼久式土器を理解していくための諸特徴が少なからず明らかにされたのではないかと考えられる。

第三章 結論

今回、兼久式土器に有効な分類を作成するにあたり、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器を文様中心に分類作成を行なった。また、その文様分類を他の兼久式土器出土主要遺跡にあてはめ分析を行なった。その結果、興味深い結果が数点確認できた。分析と結果をあげながら、それらが何を示すのか検討してみたい。

今回、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の兼久式土器を中心に作成した分類は、文様による分類である。文様分類の作成は、先行研究においても行なわれているが、それら先行研究の分類は、個々の遺跡に対してのみ有効な分類が多く、他遺跡において有効な分類であるとは必ずしも言えないものであった。何故なら、個々の遺跡のみで分類を行い、他の遺跡との相対的な比較検討が行なわれていないからである。しかも、最も細分されたレベルで分類を作成し、分析を行なうため、分析結果や分類が細かいものとなり、兼久式土器研究が混乱することの要因の一つになっていたと考えられる。

そこで、兼久式土器全体を網羅する分類を作成するにあたり、まず小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器を中心に文様分類を行うこととした。小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器を中心に分類を行なった意図を列記してみる。

○兼久式土器を出土している遺跡の中でも、小湊・フワガネク（外金久）遺跡は広大な面積に存在し、出土遺物や遺構が多数出土している遺跡であるため。

○出土している兼久式土器の数量や残存度が極めて良好であることから、兼久式土器の文様の組合せが多種にわたり、兼久式土器全体の文様分類の大半を1遺跡で網羅することが可能であるため。

○兼久式土器を出土する遺跡の大半が単純層の遺跡であるのに対し、小湊・フワガネク（外金久）遺跡では層の疊重は一部でしか確認できないが、距離差の殆ど無い一次調査地点と二次調査地点において沈線文のみの土器の存在など相違点が存在する。そのため、小湊・フワガネク（外金久）遺跡内でも調査地点ごとに分類・比較作業を実施することが可能であるため。

○全点記録方式によりデーターが詳細で豊富であるため、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の兼久式土器による分析作業が広がる可能性が高いため。

以上の点により、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器を中心に分類作成を行なったのである。

分類作業については、今まで行なわれていた文様細分による分類ではなく、大別できるものから順に分類を行うことで分類序列を作成した。この分類序列の作成により、分類に含まれない土器が出土・確認されても、新たに一分類として設定するのではなく、新資料を分類序列により系統立てて分析することが可能になり、分類序列のどの位置に位置付けられるか認識しやすく、分類設定が行いやすい。今回、兼久式土器全体の文様分類案作成の際に、他遺跡において小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器より作成した文様分類案に含まれない土器を確認したが、系統立てて分類案に組み込むことができたと考えている。また、先行研究のように細分による分類ではないため、分析を行なう際に分類序列のどの分類レベルで分析を行なうかを選択することが可能で、より良い分析が行なえる利点がある。なお、小湊・フワガネク（外金久）遺跡という極めて良好な遺物・遺構が確認された遺跡を基軸に、他遺跡の資料も比較検討し分類案の作成を行なっているため、個々の遺跡の分類と違い、各遺跡間の資料との比較検討も行いやすい分類になっている。この分類案を使用する若しくはこのような分類作業を行なうことにより、遺跡ごとに分類案を作成する必要はなくなると考えられる。

よって、今回作成した文様分類案は、先行研究の各遺跡個別の分類と相違し、今後の土器分類作業にも有効である。このことは兼久式土器の型式学的研究を進めていくための基礎条件が整えられることを意味している。

では、今回各遺跡で比較検討を行なった分析結果が、何を意味しているか検証してみたい。

今回検討対象とした各遺跡の兼久式土器を、文様分類のどの文様の組合せの土器に位置付けられるかについて確認してみると、遺跡ごとに特定の文様の組合せの土器に集中することが確認できた。この結果は、分析を行なった遺跡において主体を占めていた兼久式土器が確認できることや、文様分類における土器の組合わせが確認できるなど、その遺跡の兼久式土器の実態を明らかにしていると考えられる。また、文様分類の組合せが類似する遺跡では、文様分類において集中する土器も類似し、文様分類の組合せが相違する遺跡では、文様分類において集中する土器も相違する。この結果による遺跡間の相違は、地域差や土器の使用差としては考えにくく、時間差の可能性が最も高いと推測される。よって、文様分類の組合せが類似し、主体となる土器が類似すれば、ほぼ同時期の遺跡の可能性が高いことが分析結果より推測できる。このことは、文様分類の組合せや主体となる土器をまとめることにより、土器の相対的な序列をまとめることができる可能性があることを意味している。また、土器の組合せに伴う共伴遺物が存在すれば、編年作業へと高めていくことも可能であると考えられる。

口唇部の刻目については、今回対象にした土器では、小湊・フワガネク（外金久）遺跡のみで確認され、他の検討対象遺跡では確認できなかった。しかし、用・ミサキ遺跡において、口唇部に刻目を有する土器が確認されている。このことにより、口唇部の刻目の有無は地域差ではなく、一時期における兼久式土器の特徴である可能性が高い。また、文様分類における口唇部刻目の関係について分析を行なうと、装飾性に乏しい土器では、口唇部に刻目を施す土器が確認できない。また、装飾性の高い土器では、口唇部刻目の割合が高いことが確認できた。よって、口唇部の刻目は文様の一部であると推測され、文様の盛衰により細かい時期差の設定や、土器の変遷が確認できる可能性がある。このことから、口唇部刻目の割合は今後の研究においても注目すべき点である。用・ミサキ遺跡で出土した口唇部に刻目を有する土器は、熊本大学文学部考古学研究室の報告において沖縄のアカジヤンガー

式土器に比定されている（熊本大学文学部考古学研究室 1996・1997）が、小湊・フワガネク（外金久）遺跡で確認された口唇部刻目を有する土器と類似するため、兼久式土器の可能性が高い。しかし、沖縄のアカジヤンガー式土器の可能性依然残されており、同時期の沖縄・鹿児島の遺跡も今後分析の検討対象に入れる必要がある。

今回小湊・フワガネク（外金久）遺跡で抽出し、他遺跡で分析を行なった文様分類は兼久式土器全体を分類するのに有効な分類であることが確認できた。今後もこの作業を続け資料の蓄積を行なえば、兼久式土器の実態が明確になり、相対的比較による土器の変遷や共伴遺物による年代設定の進展が可能である。また、今回作成した文様分類は、今まで行なわれていた個々の遺跡のみの分類と相違し、兼久式土器全体を網羅した分類であるので、小湊・フワガネク（外金久）遺跡にとどまらず、他遺跡においても使用でき、今後の兼久式土器研究において有効であると言える。また、文様分類と口唇部刻目の割合の関係も有効な分析であると考えられ、小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心に分析を深めることで、細かい土器変遷が確認できる可能性が高い。

おわりに

今回、小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土の兼久式土器を中心に分析を行い、文様分類案の作成を行なった。この文様分類案を他の兼久式土器が出土する遺跡にあてはめ、分析・検討を行ってみると、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の資料が良好な資料であることを再確認した。資料の残存度が良好であり、出土量が多く、文様分類を行なうとほぼ兼久式土器の出土土器を網羅することが可能であるからである。今回作成した文様分類案は、今後の兼久式土器研究に有効であることが、分析によって確認できた。今後は資料の蓄積を行い、兼久式土器の実態解明や兼久式土器の相対的編年、土器の使用方法・地域差についても明らかにしたい。

また、筆者の力不足から小湊・フワガネク（外金久）遺跡の資料や他遺跡の資料を十分に分析が行なえなかった。今後より多くの資料を分析し、分析をより正確なものにしていかなければならない。今回、分析できなかつた属性も多数ある。検討対象資料も兼久式土器の甕形土器口縁部のみを対象にしたが、兼久式土器の形式には、壺形土器もあり、甕形土器の底部についても分析が行なえる。今後の課題にしたい。文様においても、文様のパターンと組合せの分析を行なう必要性がある。施文工具や、施文方法も検討対象である。それらの属性についても今後分析・検討を行ないたい。

今回は、小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心に文様分類を作成した。今回行なった文様分類や文様分類案作成の作業が、兼久式土器の研究に活用され、兼久式土器研究の混迷を少しでも解消し、研究が前進することを期待し、また自らも今回新たに確認した課題や分析・分類を引き続き行い、兼久式土器研究を進めていきたい。

謝辞

本稿は平成 12 年度に琉球大学に提出した修士論文「奄美における兼久式土器の基礎的研究～小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心～」の一部を修正したもので、今回は提出論文をほぼ原形のままで掲載させていただきましたが、修士論文提出後数々の優れた研究や報告がなされています。新た

な資料等を含めた検討は別稿に譲りたい。

修士論文をまとめるにあたって、琉球大学の池田榮史先生、後藤雅彦先生から多くのご指導・ご教示を頂きました。また、名瀬市教育委員会（当時）におきましては、小湊・フワガネク（外金久）遺跡の資料を扱わせていただきました。奄美博物館の皆様や学芸員の高梨修先生にも多くのご指導・ご教示を頂きました。文末ながら御礼申し上げて、感謝いたします。

引用・参考文献

- 池畠耕一 1984 『あやまる第2貝塚－笠利町文化財報告No.7－』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1983 『面縄第1. 第2貝塚』鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 内山省吾 1983 『コピロ遺跡－研究室活動報告15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 大西智和 1997 「奄美諸島における兼久式土器分類のための基礎的研究」『南日本文化』第30号
鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 小倉卓 1997 『用見崎遺跡IV－研究活動報告33－』熊本大学文学部考古学研究室－
- 小畠弘己・辻満久 1981 『宇宿港遺跡－研究室活動報告－10』
- 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の毎年について」『琉大史学』琉球大学史学会
- 河口貞徳 1978 『サウチ遺跡』笠利町教育委員会
- 河口貞徳 1996 「兼久式土器」『日本土器事典』
- 高梨修 1993 「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基礎的方針」
『法政考古学』第20集記念論集
- 高梨修 1995 『シンポジウムよみがえる古代の奄美』「マツノト遺跡出土の土器と編年」
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 高梨修 1998 「名瀬市小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査」
『鹿児島県考古学会研究発表資料－平成10年度－』
- 高梨修 1999a 『第2回奄美博物館シンポジウムサンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』名瀬市教育委員会
- 高梨修 1999b 『奄美大島名瀬市 小湊・フワガネク（外金久）遺跡－学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査概報－』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2000 「ヤコウガイ交易の考古学－奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会－」『交流の考古学』朝倉書店
- 高宮廣衛 1990 『先史古代の沖縄』
- 立神次郎 1986 『泉川遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
- 戸崎勝洋・長野真一 1987 『先山遺跡』鹿児島県大島郡喜界町教育委員会
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子・上村俊雄 1996 「奄美地域における弥生土器の型式学的検討」
『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第44号別冊』
- 中山清美 1979 『手広遺跡 発掘調査終了報告－龍郷町教育委員会

- 中山清美 1983 「兼久式土器（I）」『南島考古』8号
- 中山清美 1984 「兼久式土器（II）」『南島考古』9号
- 中山清美 1988a 『下山田II遺跡（東地区）』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 中山清美 1988b 「第四章 考古学上からみた龍郷町」『龍郷町誌 歴史編』
龍郷町誌歴史編編纂委員会
- 中山清美 1992a 「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』
南日本文化研究所叢書18、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 中山清美 1992b 『マツノト遺跡発掘調査概報－笠利町教育委員会
- 中山清美 1995a 『シンポジウムよみがえる古代の奄美「マツノト遺跡の発掘調査」』
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 中山清美 1995b 『用見崎遺跡－長島植物園開発に伴う遺跡確認調査－』笠利町教育委員会
- 中山清美 1996 『マツノト遺跡の発掘調査』『奄美考古』－第4号－奄美考古学会
- 中山清美 2000 「奄美考古学研究の現状」『古代文化』第52巻 第3号、古代学協会
- 藤江望 1996 『用見崎遺跡II－研究活動報告32－』熊本大学文学部考古学研究室
- 松原明美 1983 『辺留窪遺跡－研究室活動報告15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 美浦雄二 1995 『用見崎遺跡－研究活動報告31－』熊本大学文学部考古学研究室
- 弥栄久志 1984 『長浜金久遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』
鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1987 『長浜金久遺跡（第II・IV・V遺跡）』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1995 『長浜金久遺跡－新奄美空港に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会

図版・表

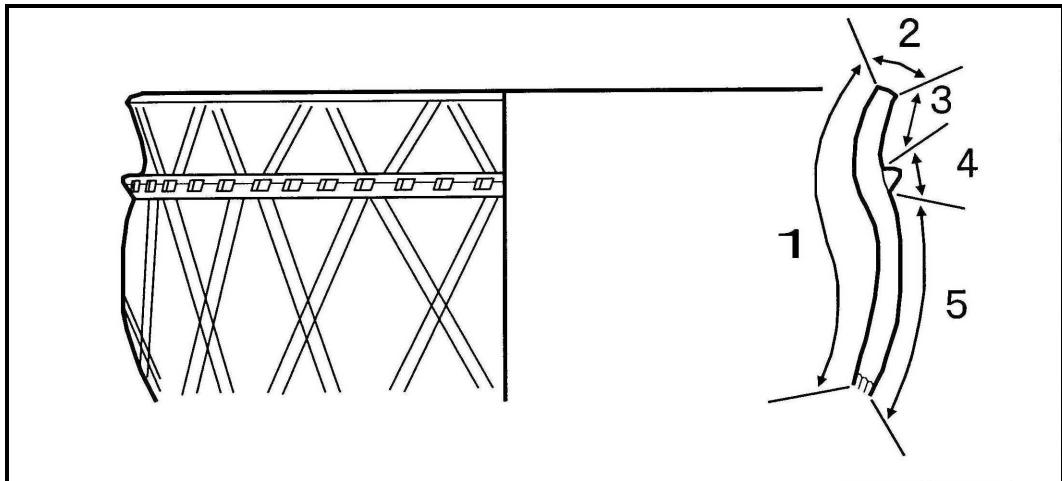
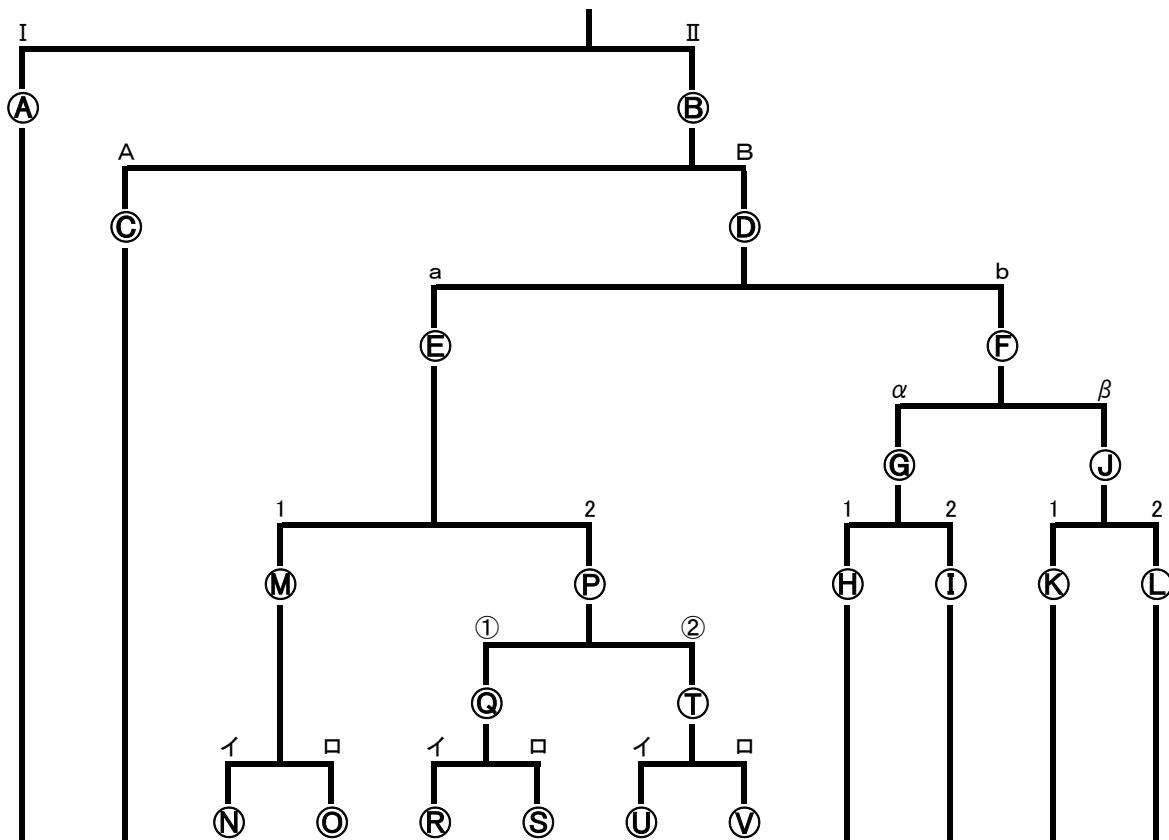


図1 文様の施文位置（文様帶）

小湊・フワガネク(外金久)遺跡出土の兼久式土器



(A)	I 類	無文土器
(B)	II 類	有文土器
(C)	II - A類	沈線文のみのもの
(D)	II - B類	隆帯文を施すもの
(E)	II - B-a類	口縁部近くに横位方向隆帯文を一条巡らせるもの
(F)	II - B-b類	口縁部近くに横位方向隆帯文を巡らせないもの
(G)	II - B-b- α類	口縁部に縦位方向隆帯文を施すもの
(H)	II - B-b- α - 1類	口縁部に縦位方向隆帯文のみを施すもの
(I)	II - B-b- α - 2類	口縁部に縦位方向隆帯文と沈線文を施すもの
(J)	II - B-b- β類	口縁部に耳状隆帯文を施すもの
(K)	II - B-b- β - 1類	口縁部に耳状隆帯文のみを施すもの
(L)	II - B-b- β - 2類	口縁部に耳状隆帯文と沈線文を施すもの
(M)	II - B-a- 1類	口縁部に横位方向隆帯文のみを施すもの
(N)	II - B-a- 1-イ類	II - B-a- 1類に縦位隆帯文を施すもの
(O)	II - B-a- 1-口類	II - B-a- 1類に縦位隆帯文を施さないもの
(P)	II - B-a- 2類	口縁部に隆帯文と沈線文を施すもの
(Q)	II - B-a- 2-①類	横位方向隆帯文の上部にのみ沈線文を施すもの
(R)	II - B-a- 2-①-イ類	II - B-a- 2-①類に縦位方向隆帯文を施すもの
(S)	II - B-a- 2-①-口類	II - B-a- 2-①類に縦位方向隆帯文を施さないもの
(T)	II - B-a- 2-②類	横位方向隆帯文の上下部に沈線文を施すもの
(U)	II - B-a- 2-②-イ類	II - B-a- 2-②類に縦位方向隆帯文を施すもの
(V)	II - B-a- 2-②-口類	II - B-a- 2-②類に縦位方向隆帯文を施さないもの

図2 小湊・フワガネク(外金久)遺跡出土の兼久式土器の文様分類案

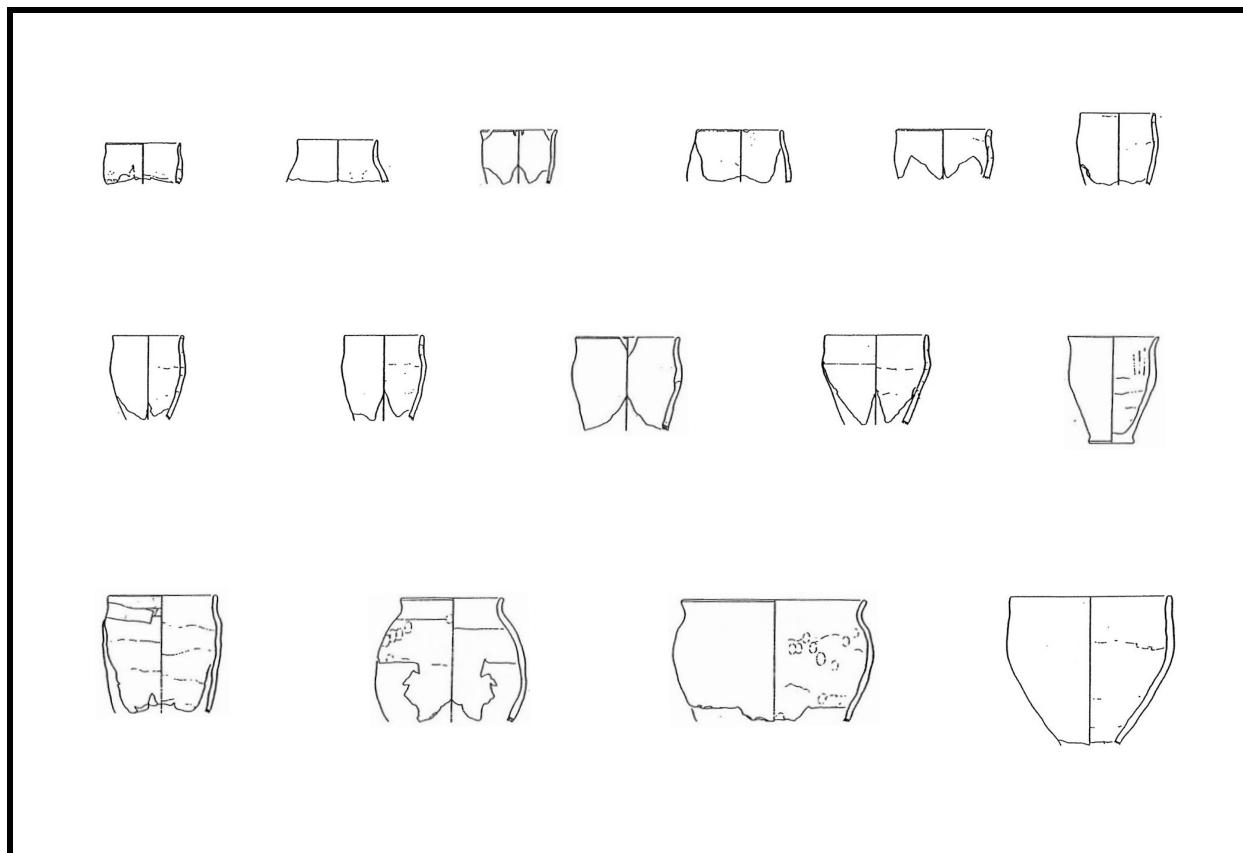


図3 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(I類) 鼎実測図より

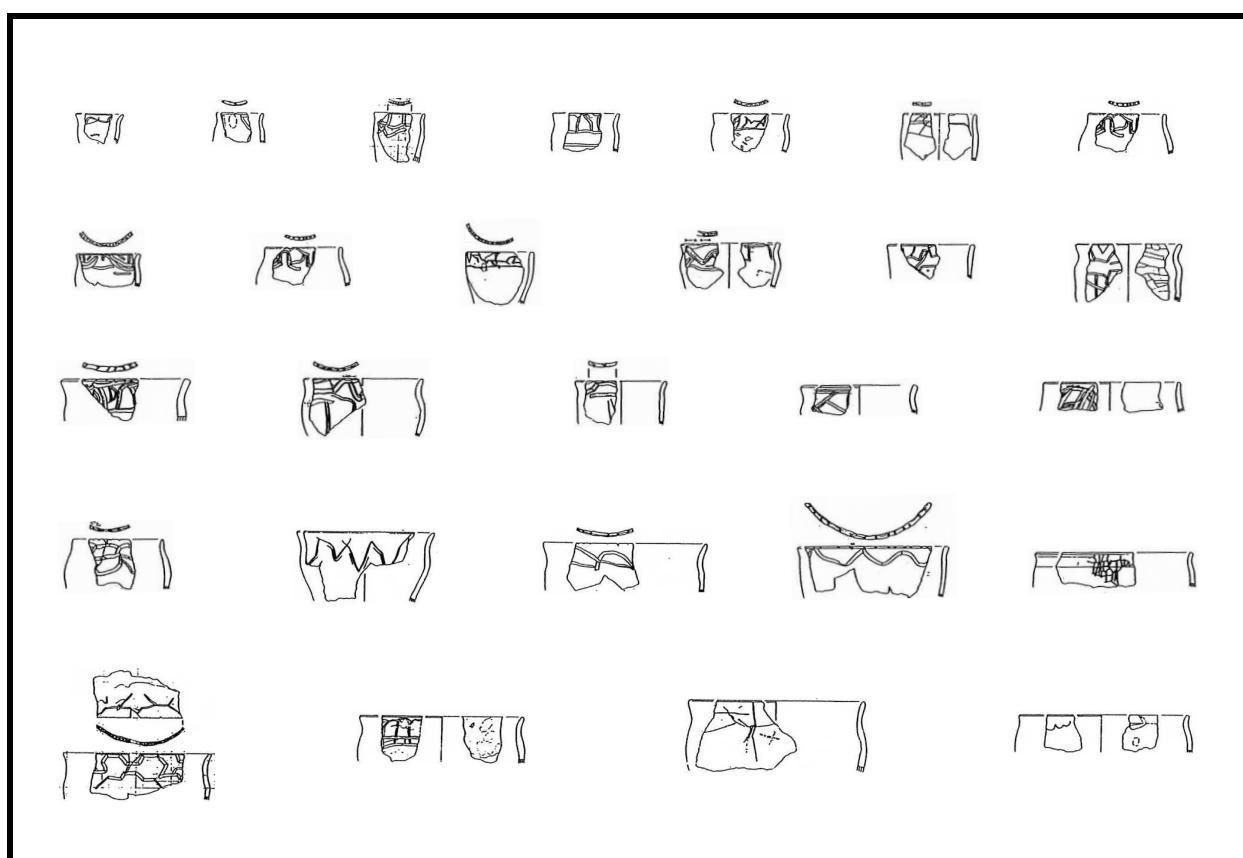


図4 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(II-A類) 鼎実測図より

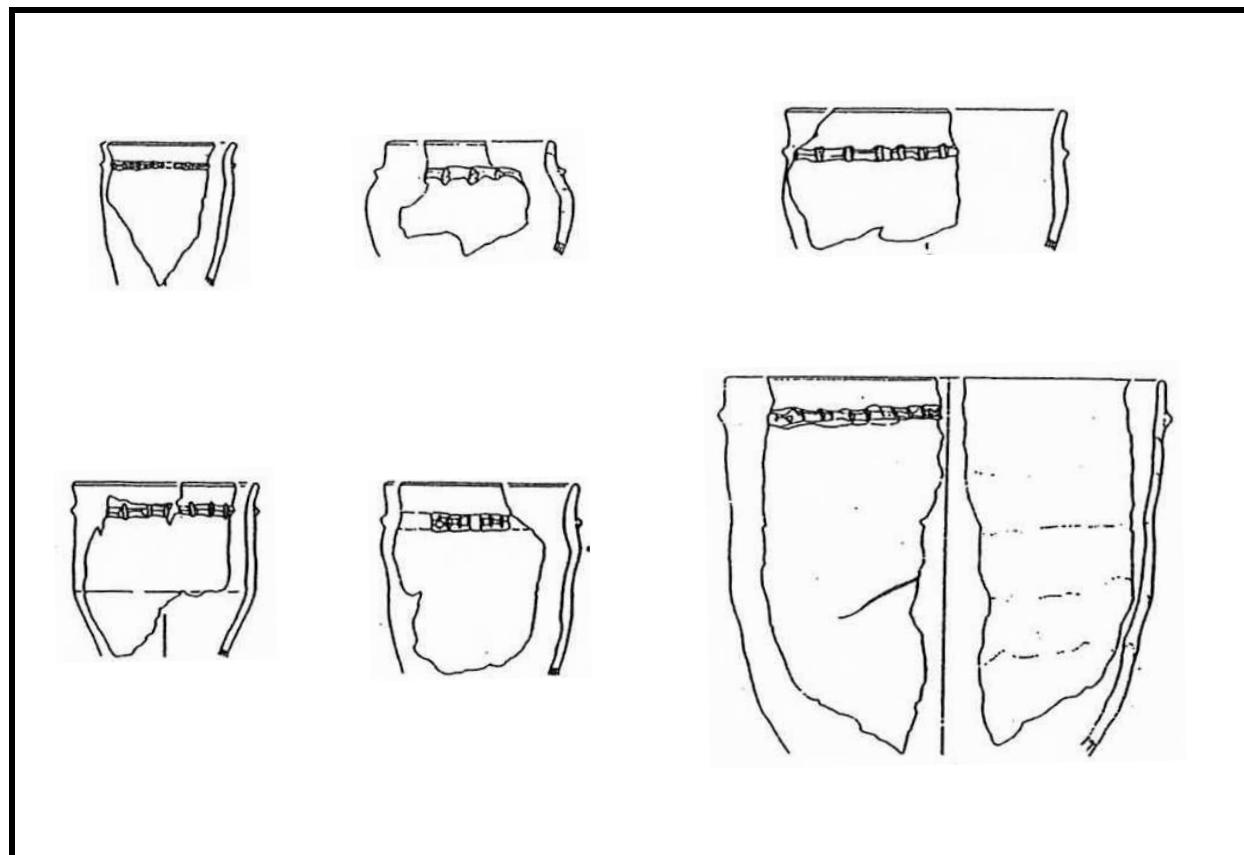


図5 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(II-B-a-1類) 鼎実測図より

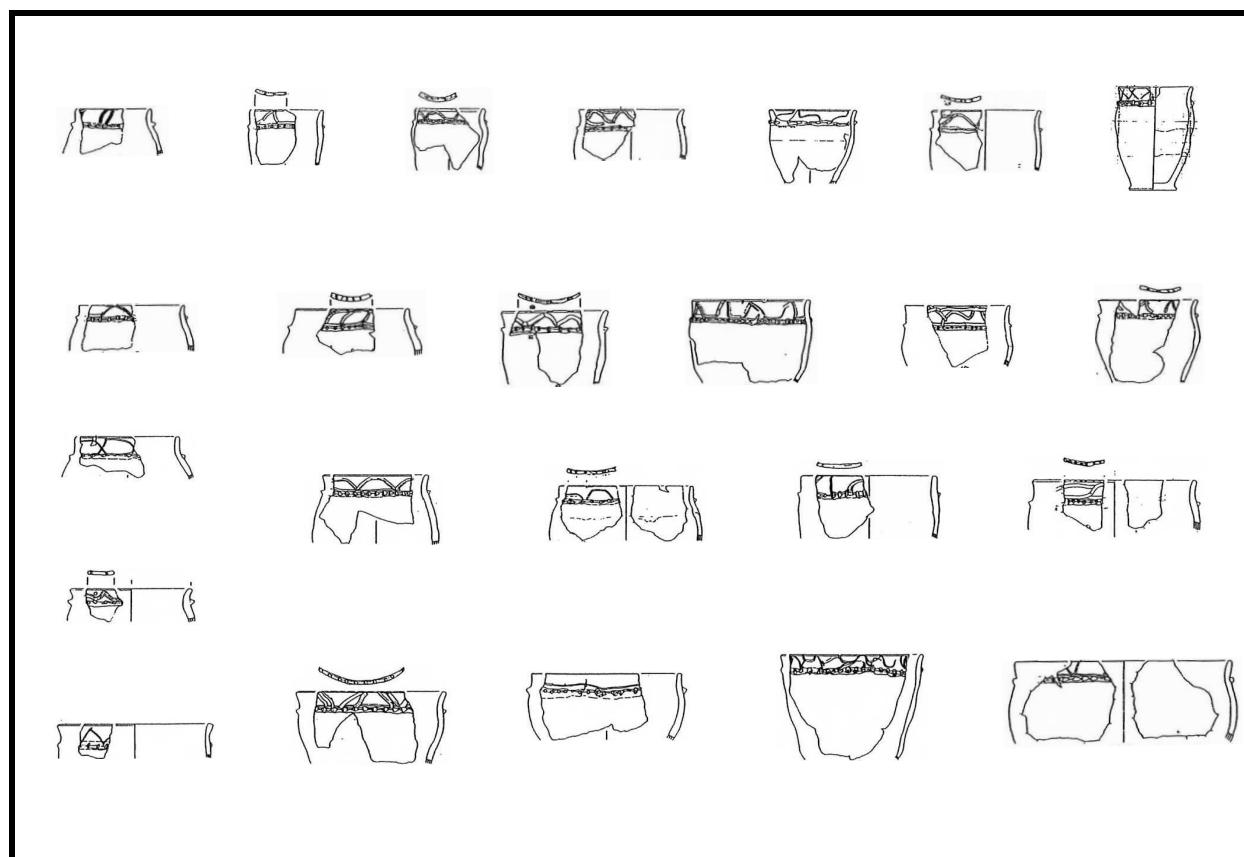


図6 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(II-B-a-2-①類) 鼎実測図より

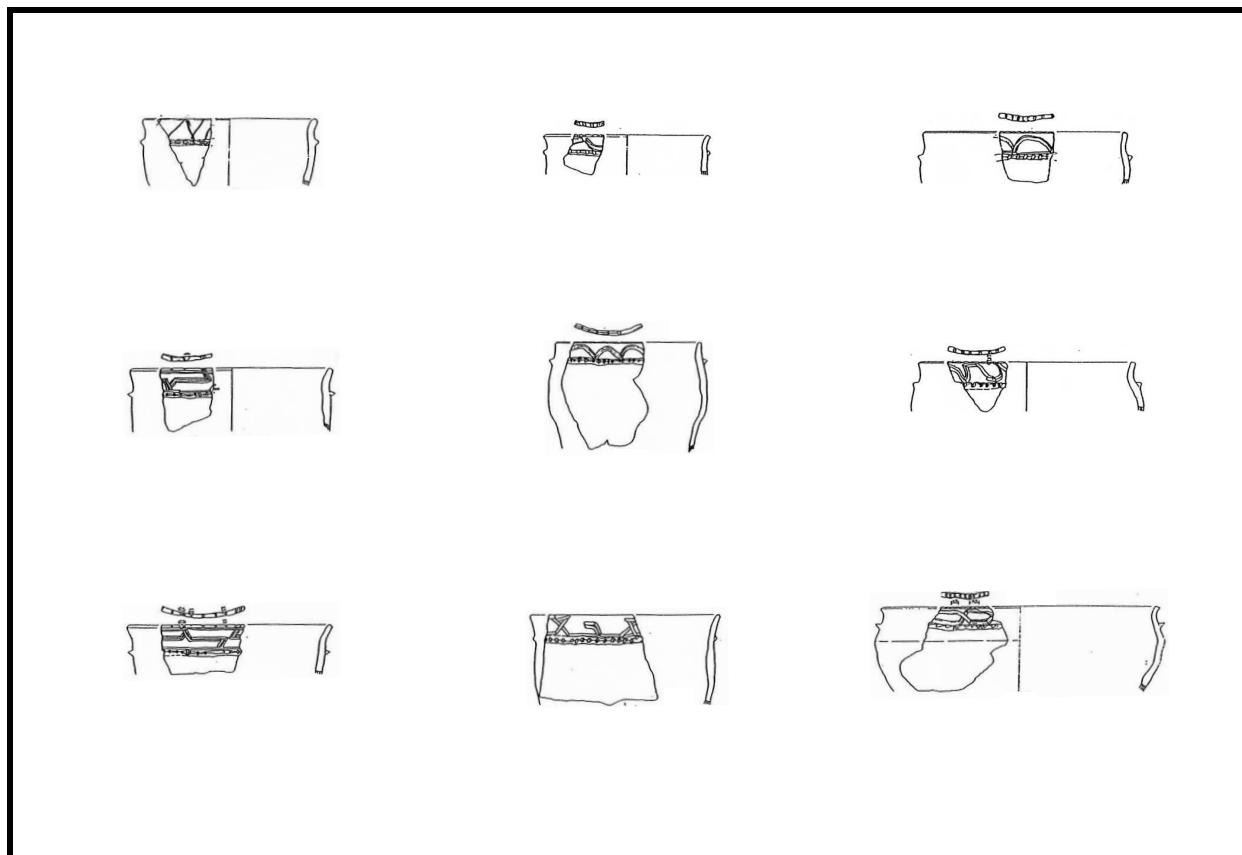


図7 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(II-B-a-2-①類) 鼎実測図より

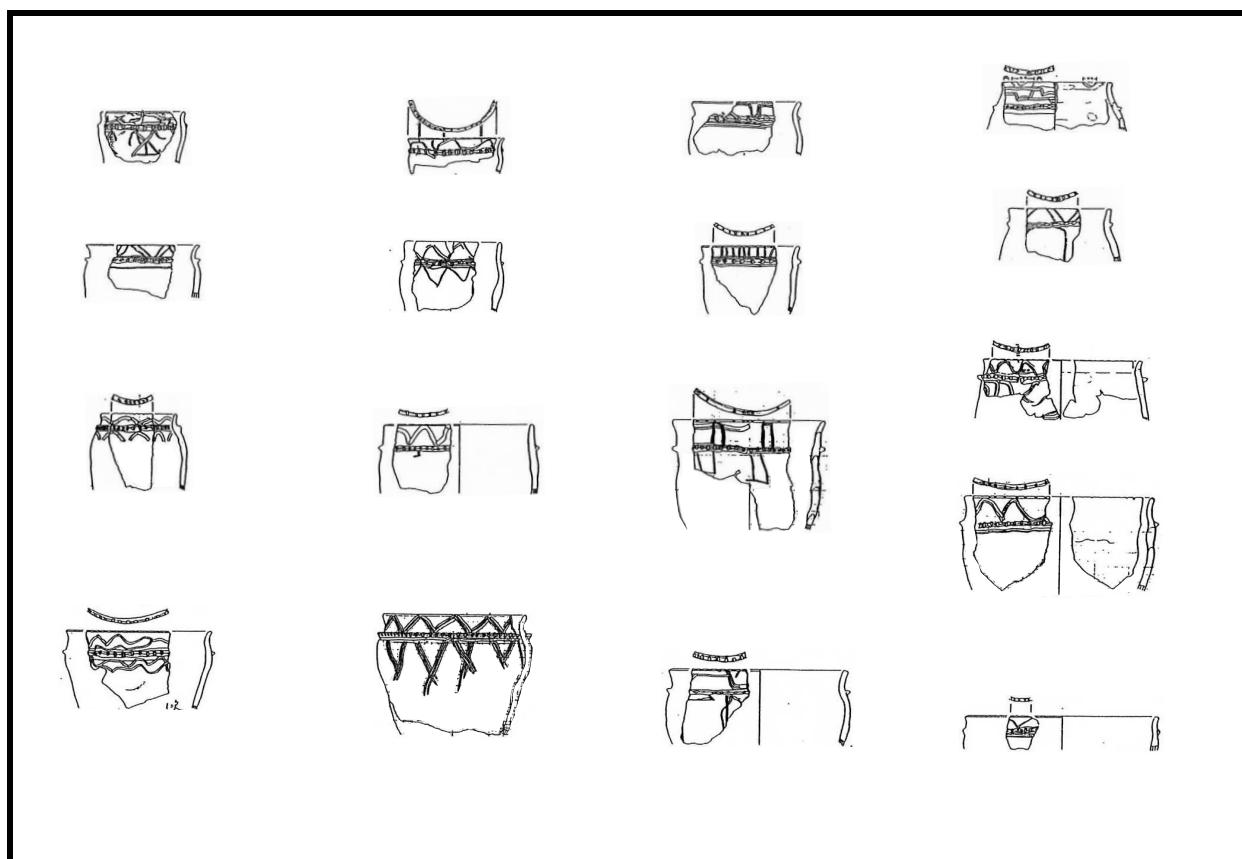


図8 小湊・フワガネク(外金久)遺跡(II-B-a-2-②類) 鼎実測図より

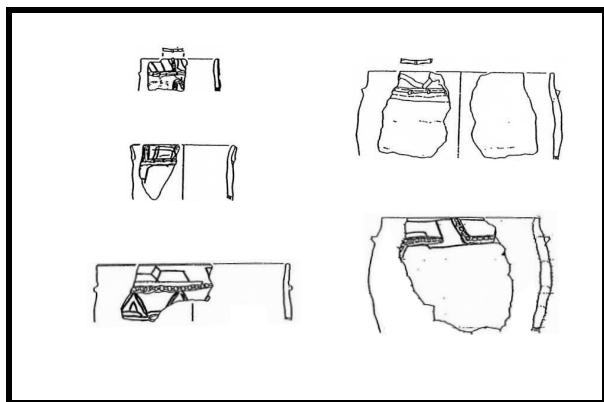


図9 小湊・フワガネク(外金久)遺跡
(II-B-a-2-②類) 鼎実測図より

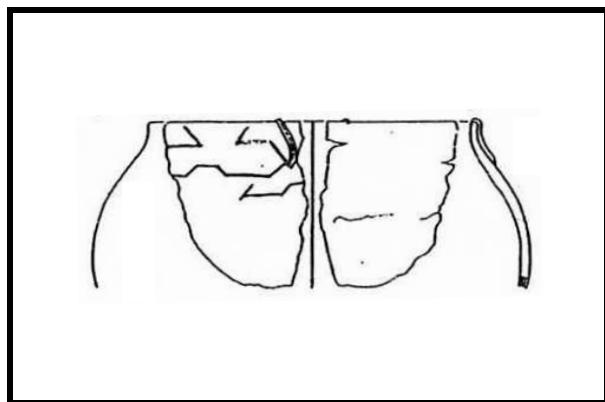


図10 小湊・フワガネク(外金久)遺跡
(II-B-b-α-2類) 鼎実測図より

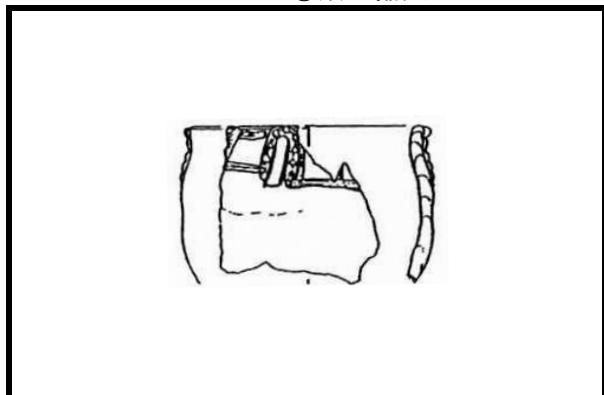


図11 小湊・フワガネク(外金久)遺跡
(II-B-b-β-2類) 鼎実測図より

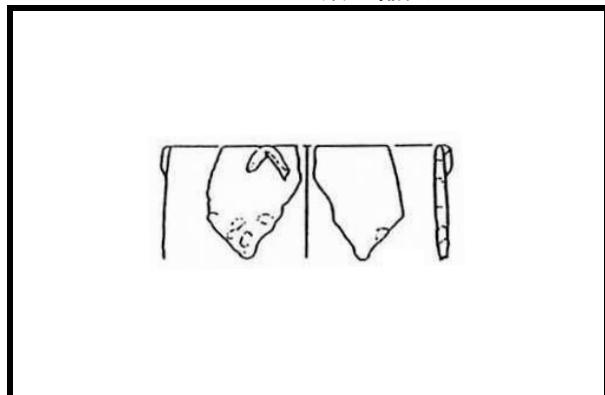


図12 小湊・フワガネク(外金久)遺跡
(II-B-b-β-1類) 鼎実測図より

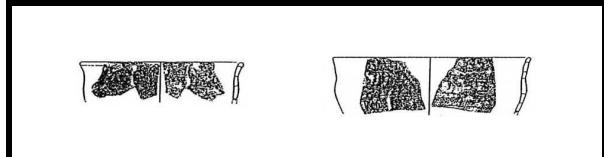


図13 万屋・泉川遺跡(I類)
『泉川遺跡』(1986)より

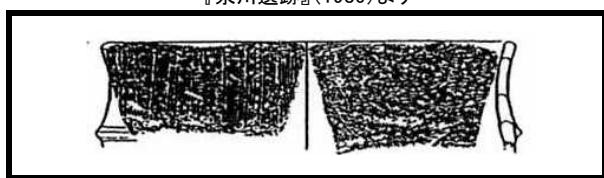


図14 万屋・泉川遺跡(不明)
『泉川遺跡』(1986)より

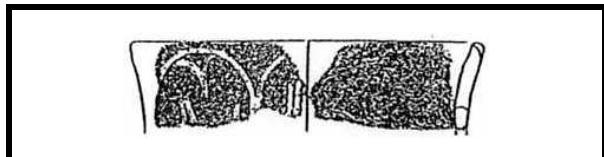


図15 万屋・泉川遺跡(II-A類)
『泉川遺跡』(1986)より

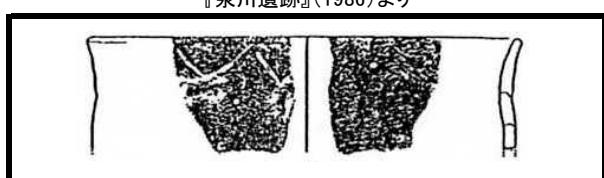


図16 万屋・泉川遺跡(II-B-a-2類)
『泉川遺跡』(1986)より

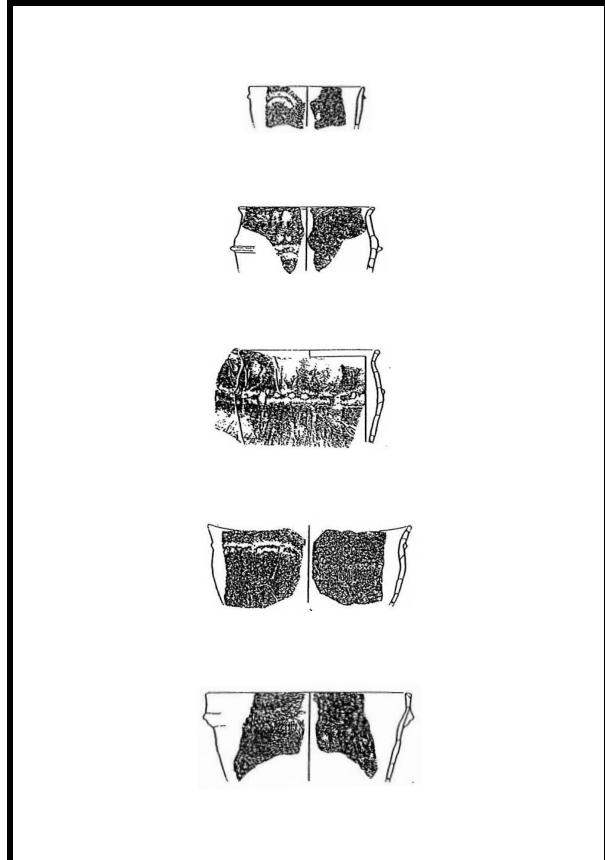


図17 万屋・泉川遺跡(II-B-a-1類)
『泉川遺跡』(1986)より

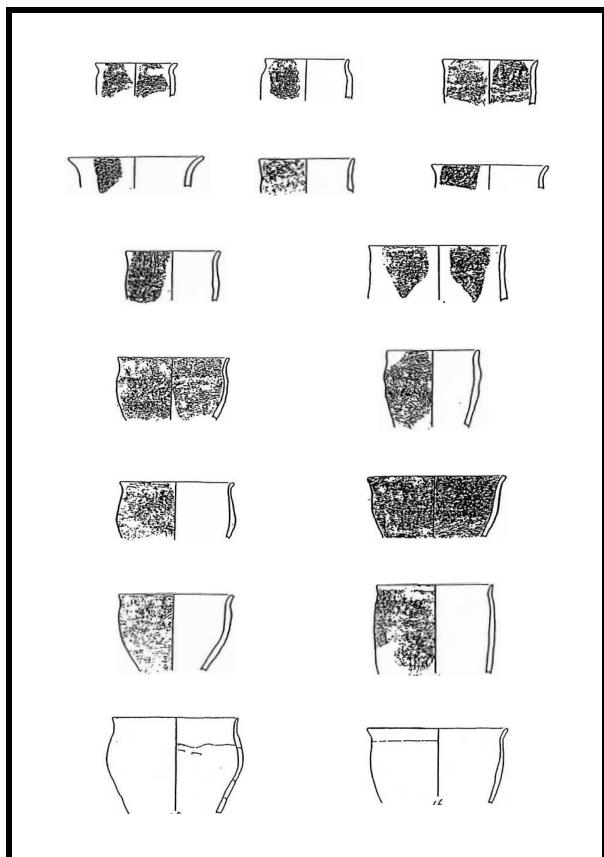


図18 和野・長浜金久遺跡(Ⅰ類)
『長浜金久遺跡』(1995)より

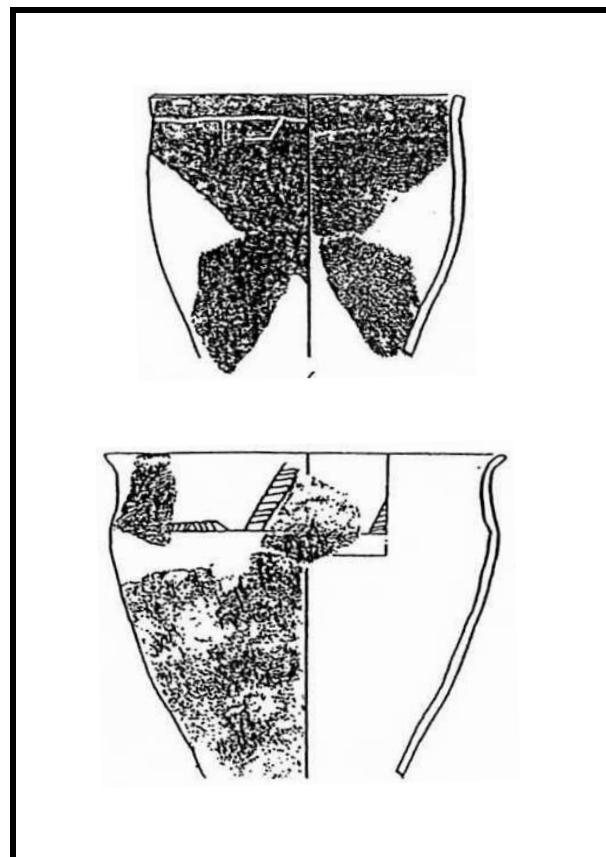


図19 和野・長浜金久遺跡(Ⅱ-A類)
『長浜金久遺跡』(1995)より

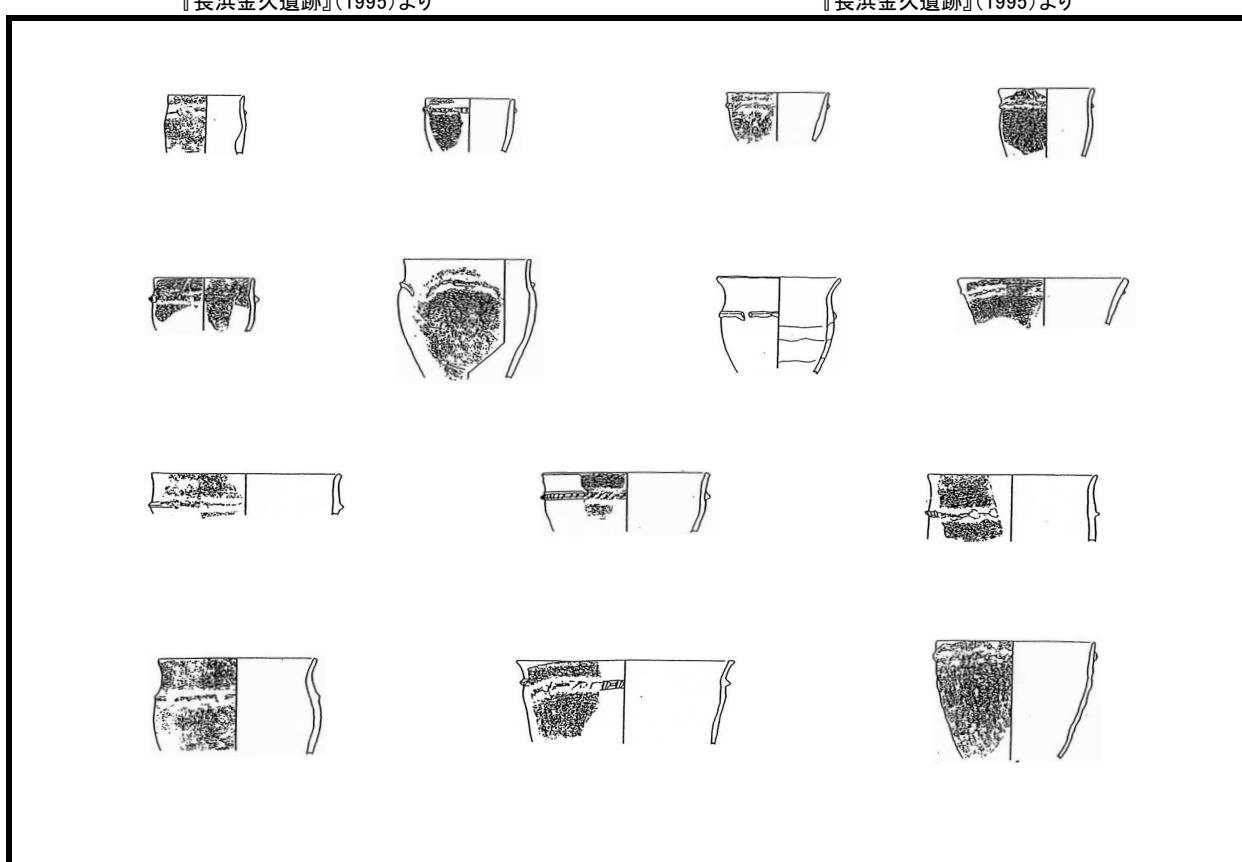


図20 和野・長浜金久遺跡(Ⅱ-B-a-1類)
『長浜金久遺跡』(1995)より

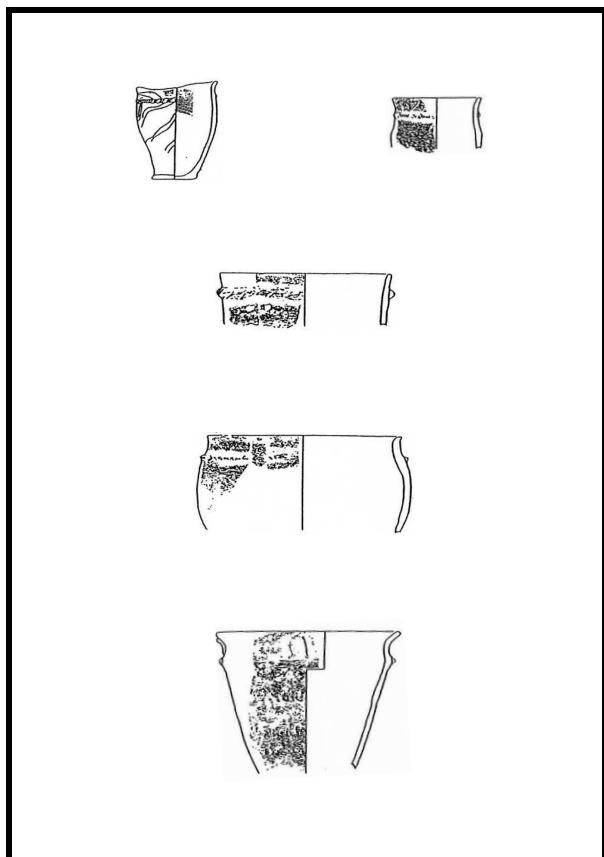


図21 和野・長浜金久遺跡(II-B-a-2類)
『長浜金久遺跡』(1995)より

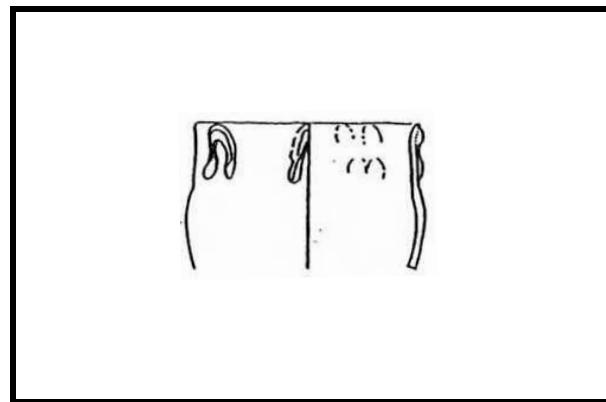


図22 和野・長浜金久遺跡(II-B-b- β -1類)
『長浜金久遺跡』(1995)より

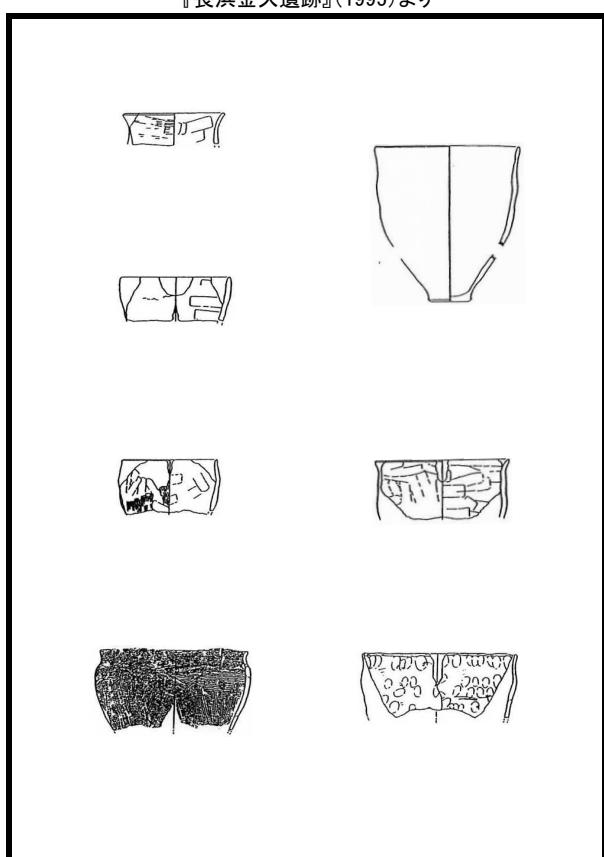


図23 用・ミサキ遺跡(I類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より

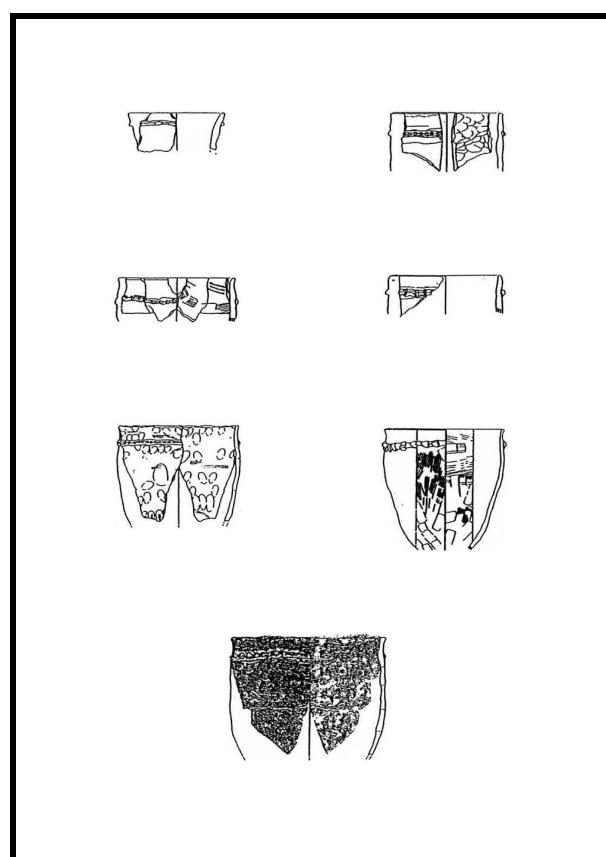


図24 用・ミサキ遺跡(II-B-a-1類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より

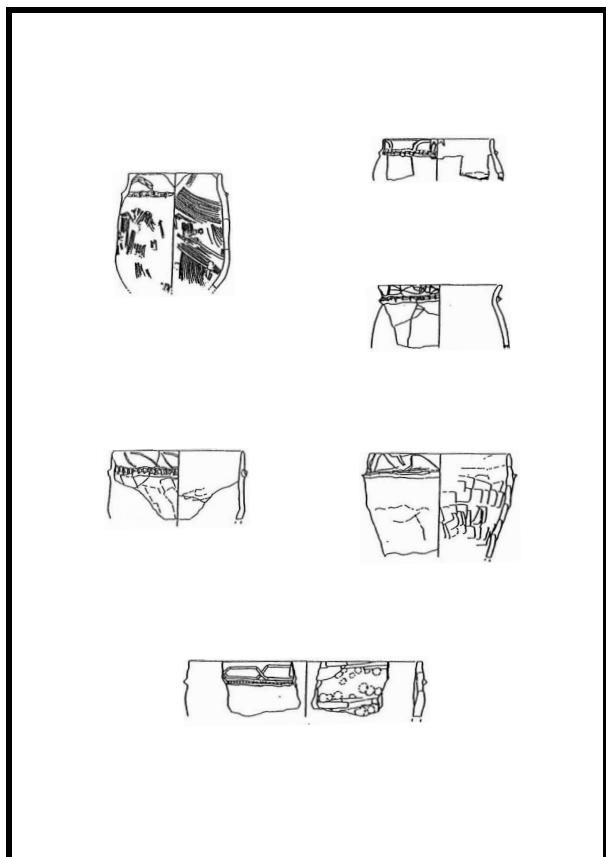


図25 用・ミサキ遺跡(Ⅱ-B-a-2-①類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より

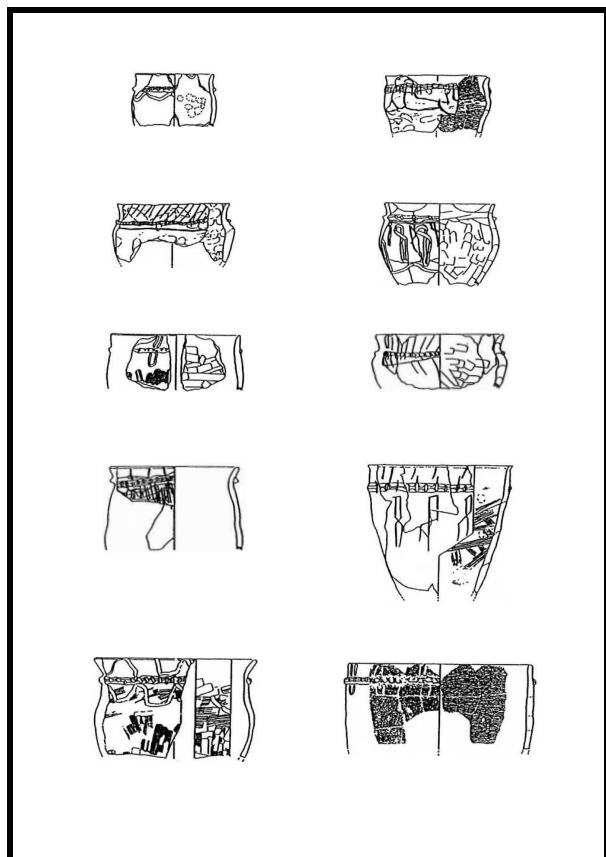


図26 用・ミサキ遺跡(Ⅱ-B-a-2-②類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より

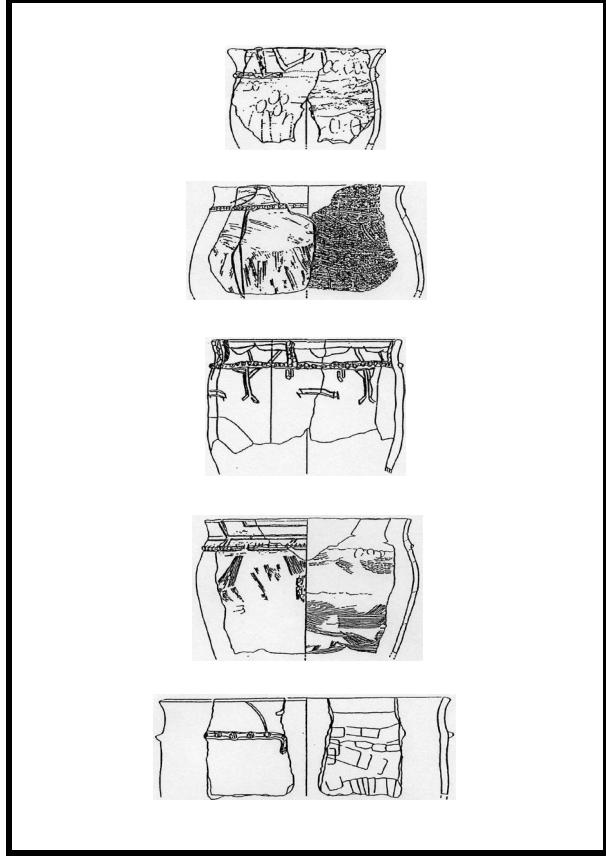


図27 用・ミサキ遺跡(Ⅱ-B-a-2-②類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より

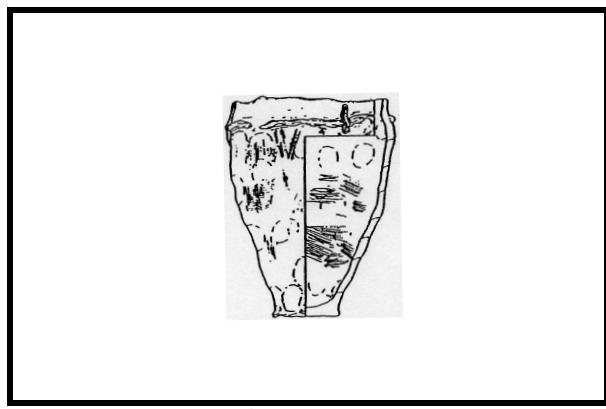
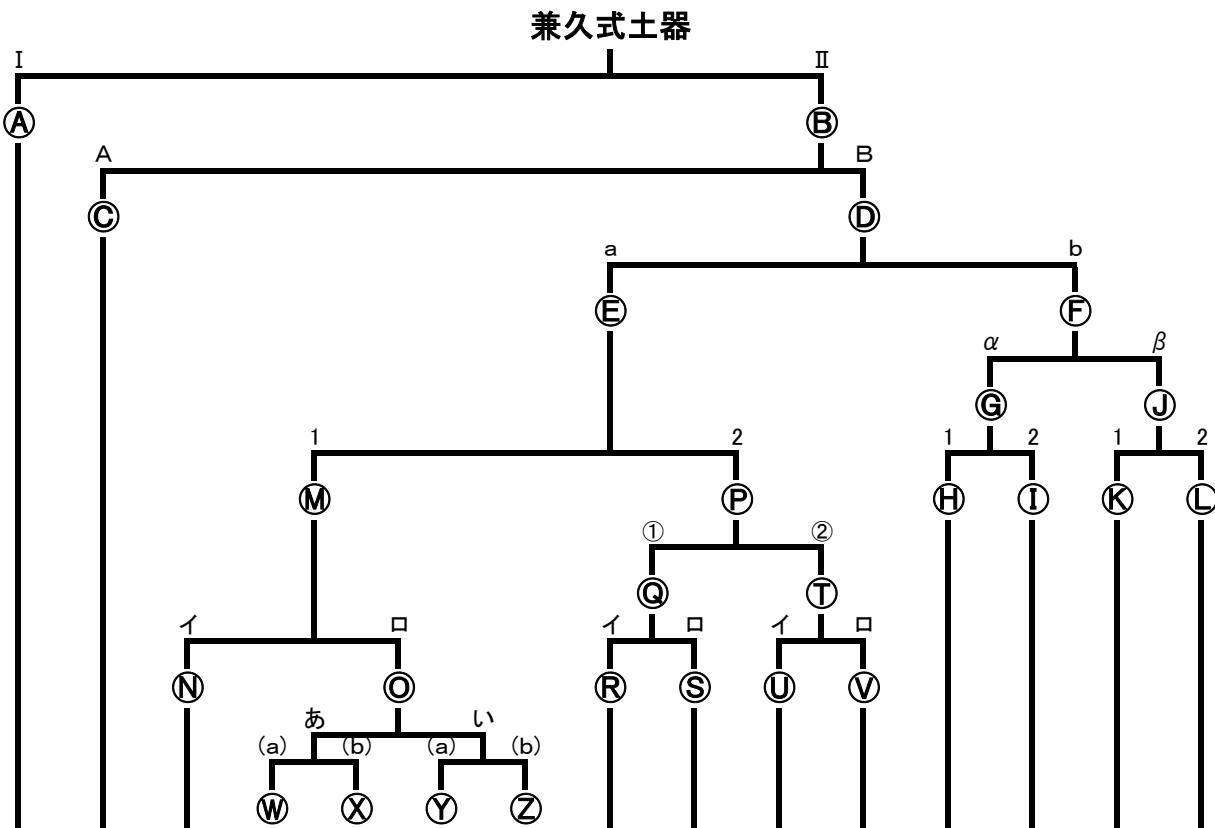


図28 用・ミサキ遺跡(Ⅱ-B-a-1-イ類)
『用・ミサキ遺跡』(中山1995, 熊本大学1995, 1996, 1997)より



(A)	I類	無文土器
(B)	II類	有文土器
(C)	II-A類	沈線文のみのもの
(D)	II-B類	隆帯文を施すもの
(E)	II-B-a類	口縁部近くに横位方向隆帯文を一条巡らせるもの
(F)	II-B-b類	口縁部近くに横位方向隆帯文を巡らせないもの
(G)	II-B-b-α類	口縁部に縦位方向隆帯文を施すもの
(H)	II-B-b-α-1類	口縁部に縦位方向隆帯文のみを施すもの
(I)	II-B-b-α-2類	口縁部に縦位方向隆帯文と沈線文を施すもの
(J)	II-B-b-β類	口縁部に耳状隆帯文を施すもの
(K)	II-B-b-β-1類	口縁部に耳状隆帯文のみを施すもの
(L)	II-B-b-β-2類	口縁部に耳状隆帯文と沈線文を施すもの
(M)	II-B-a-1類	口縁部に横位方向隆帯文のみを施すもの
(N)	II-B-a-1-イ類	II-B-a-1類に縦位隆帯文を施すもの
(O)	II-B-a-1-口類	II-B-a-1類に縦位隆帯文を施さないもの
(P)	II-B-a-2類	口縁部に隆帯文と沈線文を施すもの
(Q)	II-B-a-2-①類	横位方向隆帯文の上部にのみ沈線文を施すもの
(R)	II-B-a-2-①-イ類	II-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施すもの
(S)	II-B-a-2-①-口類	II-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施さないもの
(T)	II-B-a-2-②類	横位方向隆帯文の上下部に沈線文を施すもの
(U)	II-B-a-2-②-イ類	II-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施すもの
(V)	II-B-a-2-②-口類	II-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施さないもの
(W)	II-B-a-1-口-あ-(a)類	口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの
(X)	II-B-a-1-口-あ-(b)類	口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの
(Y)	II-B-a-1-口-い-(a)類	横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの
(Z)	II-B-a-1-口-い-(b)類	横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの

図29 兼久式土器の文様分類案

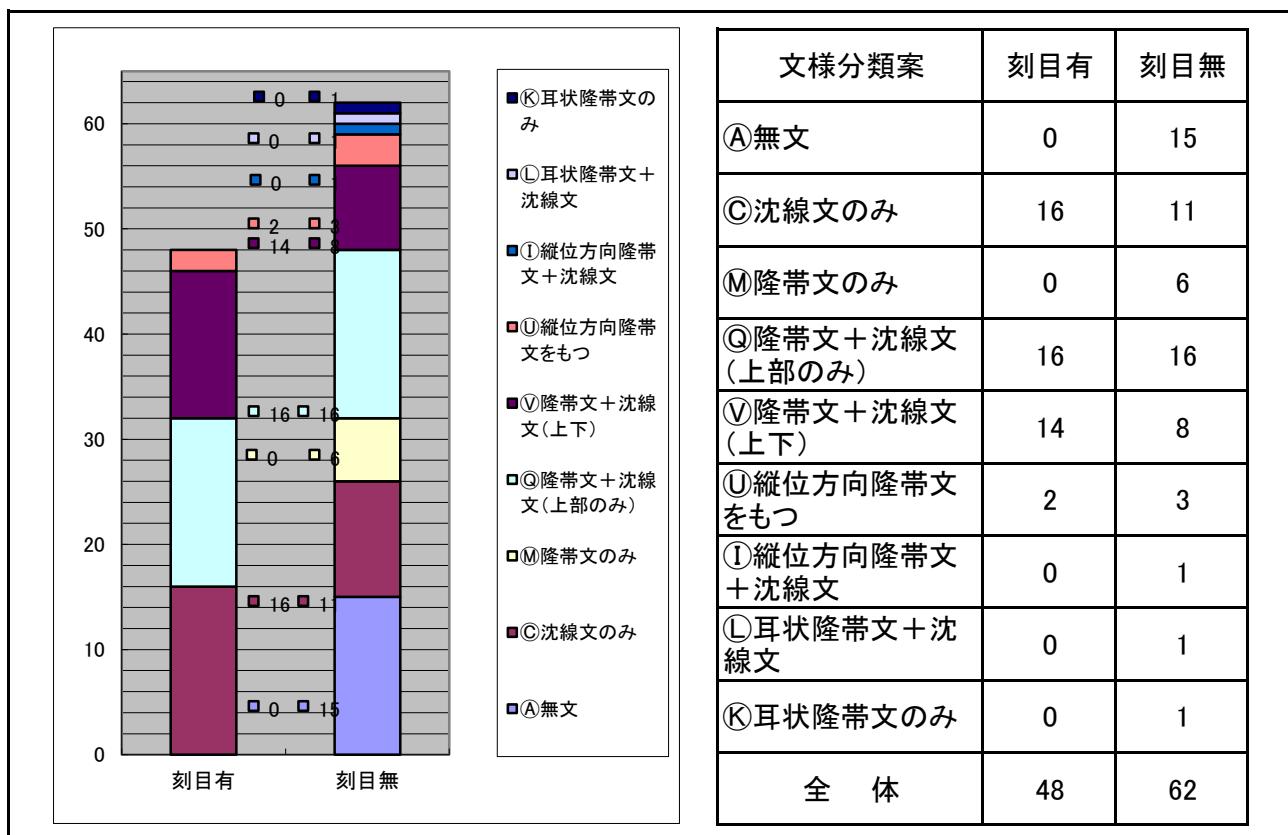


表1 小湊・フワガネク(外金久)遺跡の兼久式土器における口唇部刻目の有無

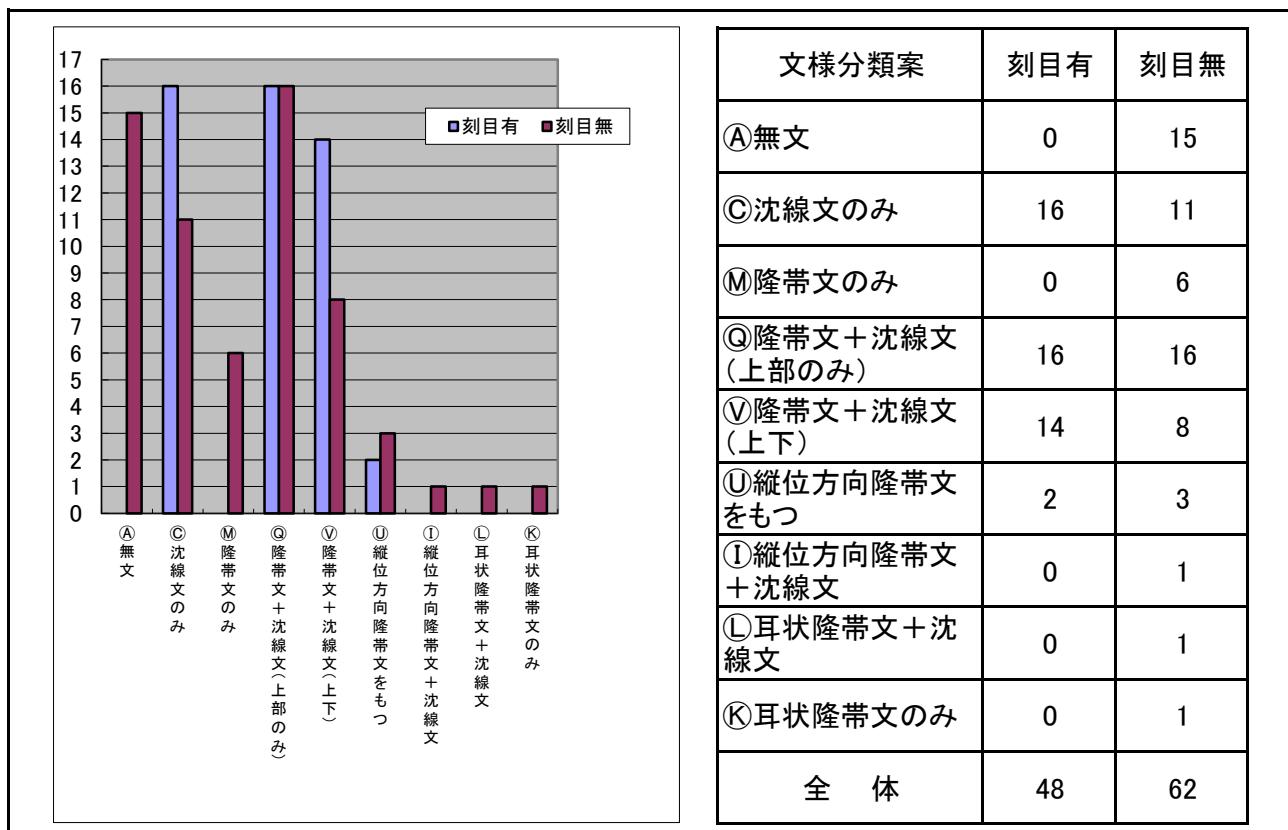


表2 各文様分類における口唇部刻目の有無

I類	無文土器
II類	有文土器
II-A類	沈線文のみのもの
II-B類	隆帯文を施すもの
II-B-a類	口縁部近くに横位方向隆帯文を一条巡らせるもの
II-B-b類	口縁部近くに横位方向隆帯文を巡らせないもの
II-B-b- α 類	口縁部に縦位方向隆帯文を施すもの
II-B-b- α -1類	口縁部に縦位方向隆帯文のみを施すもの
II-B-b- α -2類	口縁部に縦位方向隆帯文と沈線文を施すもの
II-B-b- β 類	口縁部に耳状隆帯文を施すもの
II-B-b- β -1類	口縁部に耳状隆帯文のみを施すもの
II-B-b- β -2類	口縁部に耳状隆帯文と沈線文を施すもの
II-B-a-1類	口縁部に横位方向隆帯文のみを施すもの
II-B-a-1-イ類	II-B-a-1類に縦位隆帯文を施すもの
II-B-a-1-ロ類	II-B-a-1類に縦位隆帯文を施さないもの
II-B-a-2類	口縁部に隆帯文と沈線文を施すもの
II-B-a-2-①類	横位方向隆帯文の上部にのみ沈線文を施すもの
II-B-a-2-①-イ類	II-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施すもの
II-B-a-2-①-ロ類	II-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施さないもの
II-B-a-2-②類	横位方向隆帯文の上下部に沈線文を施すもの
II-B-a-2-②-イ類	II-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施すもの
II-B-a-2-②-ロ類	II-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施さないもの
II-B-a-1-ロ-あ-(a)類	口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの
II-B-a-1-ロ-あ-(b)類	口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの
II-B-a-1-ロ-い-(a)類	横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの
II-B-a-1-ロ-い-(b)類	横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの

表3 兼久式土器文様分類表